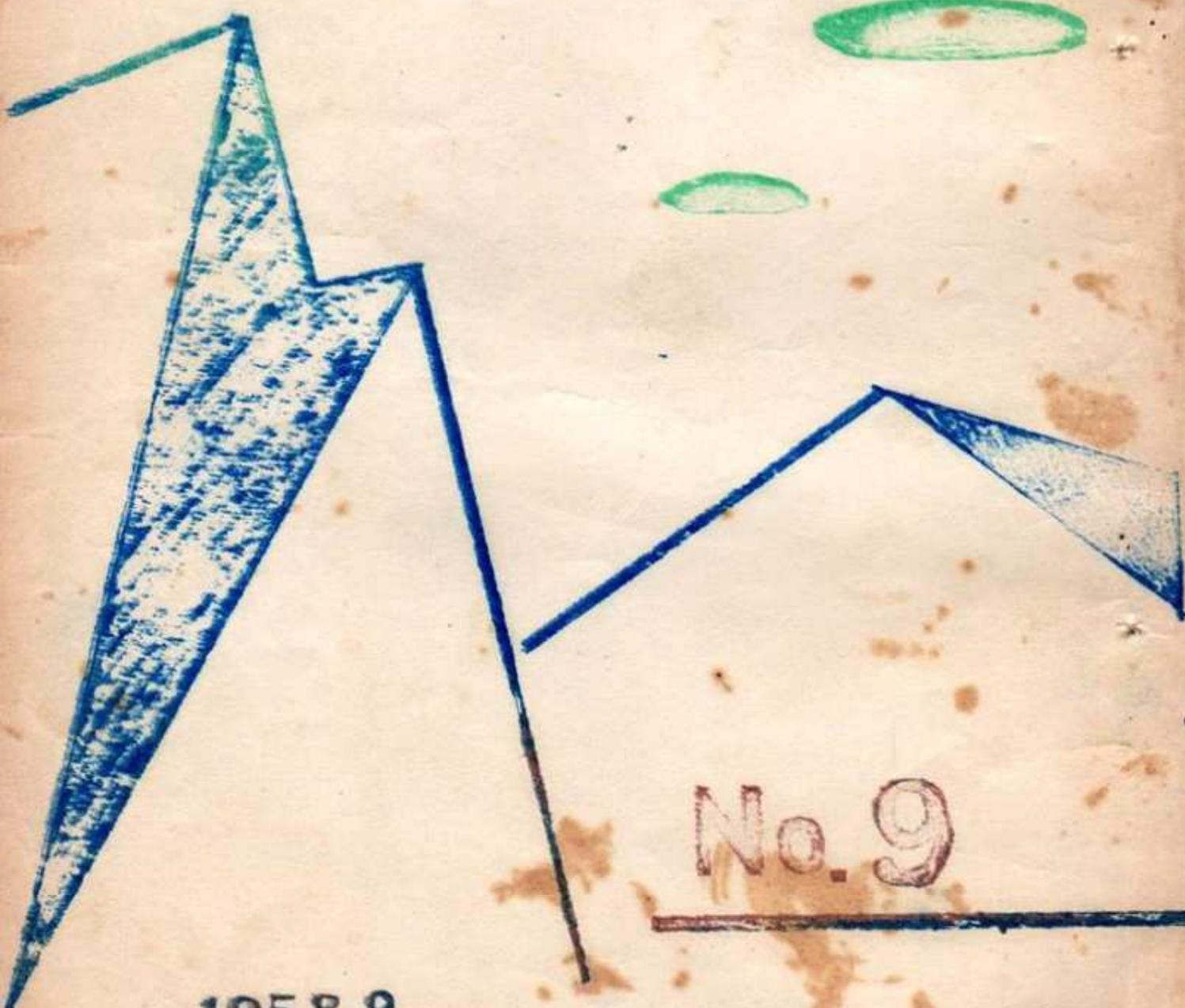


湮積



No. 9

1958.9.



1958 . Sept.

一つの山を登り終えて、さて振り返って見て、
実に胸のすくような、すっきりした山登りだっ
たと思えるくらいの登山をやってみたい、こん
なことを考えるようになった時が修業の始まり
である。

——浦松佐美太郎「たった一人の山」——

溪 稜 No.9 目 次 (1958.7.-8.)

- ▷ 卷頭言—夏を終って ◁ 辻 勝四郎 (1)
- ▶ 山行報告 ◁
- ▶ 後立山縦走 斎藤 勲 (3)
 - ▶ 横尾合宿報告 筒井満栄・吉野富子・小林敏子 (7)
 - ▶ 南アルプス全山縦走 (29)
 - 本 隊 山縣昌彦・泉頼悦男 (30)
 - A 隊 篠崎介二 (35)
 - B 隊 菅野達也 (35)
 - C 隊 村田俊満 (37)
 - ▶ 谷川岳
 - 合宿報告: 一の倉一の沢 辻 宏視 (17)
 - 一の倉沢集中 近藤澄江 (19)
 - ゼニイレ沢 亀江資之 (20)
 - 白毛門山 吉野富子 (21)
 - オジカ沢 辻 勝四郎 (13)
 - ヒツゴー沢 小林敏子 (16)
 - 松の木沢 篠原健二 (25)
 - ▶ 日光女峰山紀行 筒井満栄 (26)
- ▷ 随想 ◁
- 山と星 辻 宏視 (12)
 - 庭石の話 山 彦 (2)
 - 山と危険 山 彦 (22)
- ▷ 詩 ◁
- 頂上石 山 彦 (11)
- ▷ 仲間を語る — 菅野達也君 — (23)
- 会務報告 (28)
- 編集後記 (38)

夏を終って

辻 勝四郎

この夏はいろ／＼な面で多彩なシーズンであった。まずシーズン当初、永らく懸案であった南ア金山縦走が実行に移され、八月初旬にかけて完成された。出鼻を時期はずれの台風十一号に叩かれながらも初志一貫よく健闘された矣を祝したい。

一方、北アには女子パーティと、男子の金山縦走パーティが入り込んだわけだが、特に女子会員のみの北ア行は今夏に於ける最も大きな収穫の一つだろう。今までとかく男子会員の蔭にかくれて「附録的存在」とかこつていた女子会員が自らの計画のもとに堂々とテントを担って歩き回って来たという事は、独立心のあらわれとして女子会員の今後に明るい見通しを立て、くれたものと言ふより。一方男子隊は予定の金山と踏破するには至らなかつたが、若い会員諸君が計画し、実行したものとではまず／＼の結果で、今後の彼等に期待するところ又大である。

これら山行の間に、我々は谷峰山岳会員榎本氏穂高にて遭難という訃報に接した。今までとかく遭難とか死とかいうことを他人事として等閑視していた我々にとつて

それは身近かは教訓であり、警鐘である。この度の遭難が市岳連の遭難対策を講じる以前に生じたという矣では残念であつたが、これが流滞していた遭難対策委員会の結成を促進させ、ひいては市の岳人の同話を促すだろうことを我々は期待したいし、又当然そうなければならぬだろう。ともかく会の有力メンバーを失つた谷峰山岳会には深く哀悼の意を表したい。

八月中旬には会の強化合宿として谷川岳合宿が行われ、たか此処でも我々は生ま／＼しい墜落死を目撃するに及んで、いよ／＼人間の脆さということを痛感させられたものである。

總括的に見て、この夏は会として成功であつたと思ふ。今迄よく言われていたところのメンバーの固定化とか、個人山行には行きながら会山行への参加が少い等という難も大部是正されて来た。又、一部訓練的なものを除いて、山行計画が自発的に立てられるようになった矣など、会員がなが／＼同じように暇のとれない我が会にあつては大いに歓迎するところである。

全般的に縦走登山はもう会員個々にまかされる段階に未だし、沢登りとか岩登りの技術も年令差を超えて平均化して来たが、岩場のリーダーが乏しいようである。会として考之ねばならぬ問題であらう。

ところで、昨年度からの会山行の主体であった訓練的な山行をこの辺で切り上げて、そろそろ、会本来の基本方針である実践的、意欲的な山行に会の重きを置いてゆきたいと思う。勿論登山の段階は飛躍は許されぬものであり、基礎技術の習得ということはおろそかに出来ない問題ではあるが、それのみに終始することなく、よい山、よいルートを会の力で見出し拓こうとする意欲的なものに会の主力を向けたいと思うのである。

秋を迎えれば冬はもう近い。会として未だ殆んど手をつけていない冬山も、その基本的なものから計画的に進めて行きたいものである。

以上、主として山行面についてとりあげたのであるが、その他山話会のもち方が、会費の問題とか、会務における会員の雑役的負擔の偏重等々、山行以外にも会員全体で考へなければならぬ問題も少なくない。今後一層会への協力を願うや切である。



庭石の話

山彦

下界に居ても、夏の入道雲を見ては遠い峯を想い、冬の本枯しに吹かれては稜線の雪煙を想い浮べる位になると、もうかなり山に憑かれてゐる方だろう。

毎日勤めに通う途中のある家の門前に、暫く一抱之程の庭石が置かれていたことがあった。急ぎ足で通り過ぎながらも二日目か三日目頃には、その石が自分は何らかの作用を及ぼしているのに気付いたものである。その作用は目を通じて無意識のうちに足先や手の指にあの岩肌の感觸をよみがえらせていたのだと覺った。そう介るとおかしなもので、それから毎日そこを通りながら目はホールドを、スタンスをその庭石の肌に乗せ採したのであった。

そんな或る日、遊びに来た丁君とたま／＼そこを通りかゝると彼は言ったものだ。「この石はアイガーの北壁に似てるなあ」と。

処で最近浦松佐美太郎氏の本を読んでいたら「岩登りの味」という文の中で、氏が石屋の店先の石に惹き附けられ、何千米も高く大空の中に聳え立つ岩峰を想い出すことが書かれていた。同病相憐れむというか、自分も意を強うした次第である。



才1日(8月4日) 晴

| | | |
|-------|-------|---|
| 松本 | 4.10 | |
| ↓ 猿倉 | 7.10 | 着 |
| | 7.35 | 登 |
| ↓ 白馬尻 | 9.00 | |
| ↓ 平 | 12.20 | |
| ↓ 村 | 16.30 | |
| | | △ |

松本の旅館を出たのは四時前、外はまたうす暗く、街灯の光がぼんやり霞んで見とる。人影は見えないが、それでも松本駅へ来ると登山者で大部賑わった。松本駅からバスに乗り約三時間で猿倉に着く。

樹林帯の中、湿った緩い登り道を通ると途中で沢に出る。此処から仰ぐ頂上附近の岩肌と真青な空がすくなく見えてある。

何しろ十貫程の荷が重くてやり切れぬ。フツ／＼言いながら白馬尻に着く。大雪渓を目前にして、この分では先が思いやられると顔を見合わせたものだ。一と休みして出発。

他のパーティはアイゼンを着け、荷物も軽いせいかスタ／＼と登って行く

のに較べ、我々はアイゼンもピッケルもなし、重い荷に喘ぎながらうつぶいいて黙々と進む。

ガスの移動が激しく、猫の目玉のようにガスったり暗れたりする。その暗闇に見える稜線のスカイラインは紺碧の空をバックにくっきりと見事である。

葱平で昼食をとる。下の大雪渓からは蟻の林に行列をなして色とりどりの登山者が登ってくる。

左に大雪渓を見、更に向うに切り立った杓子岳を眺めながら進めば、やがて径の両側にお花畑が展開する。直ぐ上に村堂小屋が見えるのだが、なかく／＼足が言うことを聞かない。気が緩んだ為か、この頃から三人共バテ気味で、十分歩いては休むを繰り返すという大変芳しからぬ状態だ。予想外に時間をくいと、村堂小屋に着いたのは四時半になる。小屋の一寸上に幕営する。

才2日(8月5日) 晴

| | |
|----|------|
| 復往 | 8.40 |
| 上頂 | △ |
| 小屋 | △ |
| 堂馬 | ↓ |
| 村白 | ↓ |
| 鐘唐 | ↓ |
| 松 | ↓ |
| 小屋 | △ |
| 松 | △ |
| 唐 | △ |

今日は午後から天気が悪くなると小屋の親爺さんが言うので、此処に停滞するつもりで空身で白馬岳頂上に登る。遮るものなく三六〇度の展望。信州側の雲海、立山、劔岳は言うに及ばず。遠く白山、槍から南アルプスの山々まで見える。三人で記念撮映をして、テントへ戻ったのが八時半。相変らずの青空で、どうも天気は悪くなりそうもないので、テントをた、んで一路唐松岳目指して出発する。

相変らず荷物は重く、今日は行ける所まで行って暮堂しようというわけで、天狗の御池で水筒に一杯水をつめる。此処の雪渓の融けた水はうまい、此処で一泊したいところだが、まだ時間も早いので足どりはすこにすこにする。

天狗尾根を勿体なくなる程下って、天狗の上りにかゝる。この上りはかなり苦しい。次いで不帰峯にかゝる。途中ニ、三ヶ所所鉄線が張り付いてあり、大した処ではないのだが、荷物が重く大まいために足がガク／＼し、慎重に一歩／＼わたる。

不帰峯を通過し、唐松岳を目前にする鞍部に出る。はや太陽は西に傾き、間もなく雲の彼方に没しようとしている。鉛のように重い足を引きずってやゝこのこと唐松頂上に立つ。薄暗くなった稜線を一気に小屋の下まで下る。急いでテントを張り、中へころけ込むと、何をするのも厭になる程疲れ切っていた。

才3日(8月6日) 晴

| | | |
|----|---|-------|
| 小屋 | △ | 7.40 |
| 小屋 | △ | 11.00 |
| 五 | ↓ | 11.30 |
| 五 | ↓ | 13.35 |
| 五 | ↓ | 17.30 |
| 唐 | ↓ | |
| 松 | ↓ | |
| 松 | △ | |
| 唐 | △ | |

例によって今日もトップは篠原君、次が高須賀君、ラストは僕という順である。

牛首、大黒岳と過ぎ白岳の登りが終わったのも束の間、前方に見上げる林は五竜岳が聳えている。五竜の急な岩尾根を喘登するとハイ松が現われて固もなく頂上に着く。相変らず今日も調子は悪く、五竜小屋から頂上まで二時間もかゝる始末。

瘦尾根を注意しながら進み、いくつかのピークを越え、八峰キレット小屋の一つ手前の鞍部にピヴァークすることに決めた。なんでもこの先鹿島槍の吊尾根までテントを張るよくな処はないと聞いていたので。

夕暮の雲海が実に美しい。その雲海の上に劔、立山がはっきりと頭をのぞかせている。

食事をすませ、星空を心ゆくまで眺めながら、テントを頭から板って眠りについた。

空いっばいに散りばめられたよう

な星が、我々三人のくるまったテントを照らしていた。

オ4日(8月7日) 晴

| | |
|------|-------|
| キレット | 8.45 |
| ↓吊尾根 | 10.30 |
| ↓鹿島 | 12.00 |
| ↓檜岳 | 12.50 |
| ↓池小屋 | 13.15 |
| ↓冷池 | 14.25 |
| ↓種池 | 17.00 |

幸に昨夜は天気良く、露も余りおりなかつた。今日は吊尾根までにしようと思つた。ゆっくり起きこのんびり出発する。

いよ／＼鹿島檜の登りだ。昨日、一昨日と眺めていた待望の山だ。今日こそはあれに登るのだと思つたと自然にフアイトが湧いてくる。

最初はキレットの登りだ。大して危険な処でもないが、一寸スリルのある急な傾斜を黙々と一歩／＼慎重に辿り、十時半吊尾根に飛び出す。

此処の雪渓で一時向半ばかり遊んでから鹿島檜南峰を一気に這い登り一ヒ休み。信州側はガスっているが、反対

側の黒部、立山、劔方面は実に良く見える。時々、目の前を岩燕が尻を切つて飛んで行く。誰か、痛むなあと思つて羨ましく思っている。

鹿島檜から下り、お花畑や樹林帯を抜けて冷池小屋に着く。此処は水場が遠いので種池まで行くことにする。両側をハイ松で覆われた緩い道をゆっくり登りつめると爺岳だ。これからは下る一方で、樹林帯を下り、お花畑を抜けて進んで行くと、ガスの中に種池小屋が見えてくる。小屋を通過して向もなく種池に着く。

今日は調子が良かった所為か、吊尾根までの予定がとう／＼種池まで未でしまった。然しこの種池の水の悪いのには閉口した。よく腹をこわさないものだ。

オ5日(8月8日) 晴

| | |
|-----|-------|
| 種池 | 5.00 |
| ↓小屋 | 6.30 |
| ↓岩 | 7.55 |
| ↓鳴 | 9.05 |
| ↓赤 | 12.00 |
| ↓大 | 13.15 |
| ↓針 | 13.40 |

今朝は珍しく五時に出発。朝のすがすがしい空気を胸一杯吸い込み、後から朝の陽光をうけて、草露にズボンを濡らせながら歩く。

黒部側からは絶えず尻が吹き上りてくるので汗もかかず、実に気持ちよい。

三人共調子が良く、岩小屋沢岳、信越乗越も軽く過ぎる。岩小屋沢岳の下りでは雷鳥の親子を見かける。

鳴沢岳まで一気に飛ばし、頂上では遠く白馬岳や南アルプスも望まれ、雪渓の多い劔、立山が手に取るように見える。

その劔、立山も、赤沢岳のピークに立つとぐっと距離も近付き、最高の眺になる。四日前に白馬から眺めた劔と、今此処から眺める劔とは大部形が違う。急峻な、長い長次郎、平蔵の雪渓がはつきりと見える。

余り展望が良いので見とれて、うちに、又信州側からガスが湧いて来た。

下りは時折鹿尾根がある。スバリ

岳との鞍部で昼食をとり、スバリの登りにかゝる。この岩稜の登りは長く相まきつゝい。

この頂上に立って見ると、針ノ木岳が眼前にせ、リ立っている。

スハリ岳と針ノ木岳との鞍部に下りると、針ノ木峠から大町へ下る道が見える。実は針ノ木

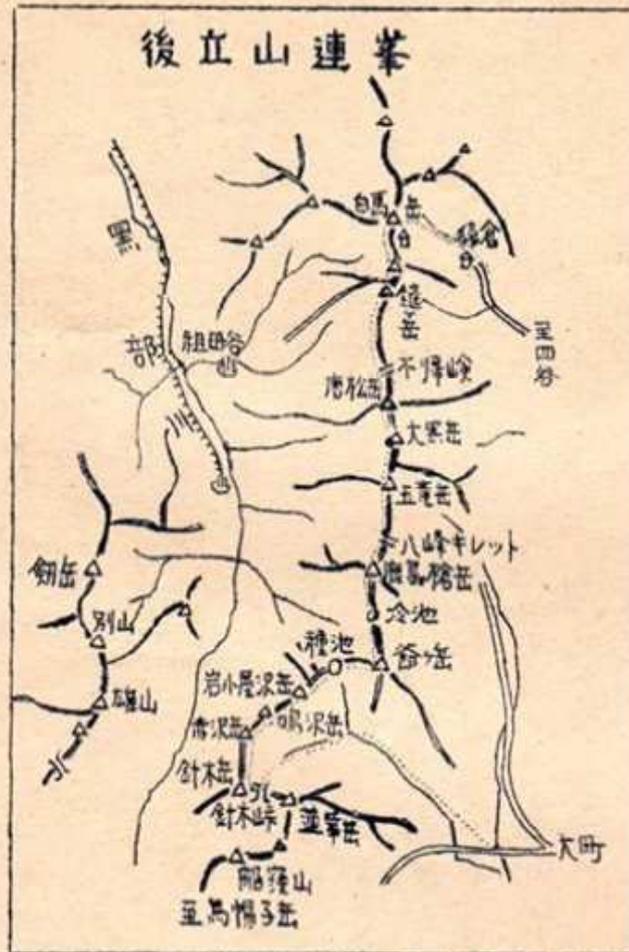
峠から更に鳥帽子へ向い槍までの縦走をするつもりで来たのだが、峠から下る道を見たら槍まで行くのが少々臆却になつた。

針ノ木岳頂上に立ったときにはガスのため周囲は何も見えなかつたのは残念。小休止後、早々に腰を上げてすぐ下に見える日本三峠の一つ（標高はオ五位）針ノ木峠に着いたのは二時少し前。

此処には大介沢山、色とりどりのテントが張られていた。

遠い九州からやって来たのが福岡大

学山岳部と書かれたテントの横に我々も幕営する。三、四日前から我々と抜きつ抜かれつして来た四人のパーテイも向もなく到着。後で我々のテントに駄弁りに来て、その中二人は浦和の人だと介り、一しきり話に花が咲いた。



オ6日(8月9日) 晴

針ノ木峠 11.25
↓
バス停留所 14.00
↓
大町

今日も天気が良い。我々が山に入ってから今日まで一滴も雨が降らな。それどころか連日の晴天で皆焼けたこと焼けたこと。元来の色がこねだけ照り付けられてはかばわぬ。篠原君の御面相ほど、目も当てられぬ程である。

峠からジグザグ径を下り、その径は途中で雪渓に入る。グリセードにかシリセードだかてそれと下ると径は大沢川に沿い、大沢小屋を過ぎると広い道路へ出る。此処は関西電力が大町から黒部へ抜けるトンネルを掘っている処だ。大型トラックが何台も行きかう中をバス停留所に急ぐ。四時半のバスをほんやり待っていたら、トラックが来て何んとか乗せてもらった。

かくして白馬から槍までの縦走計画は、針ノ木峠までの後立山だけの縦走に終わった事は残念であるが、天候に恵まれ、楽しい旅であった。

夏の山行を女子会員たりて計画
 実行してみたいという希望がかな
 えられ、四日麻横尾にテントを張
 ったともかく水入らず(?)のテ
 ント生活をすると共に周辺のいく
 つかの山を歩いてくることが出来
 た。

女子のみの何日にも互る山行は
 今回が初めてなので計画は控えめ
 にし過ぎた感もあり、コースや食
 糧など大いに反省すべき点は多々
 あったけれども、これによってテ
 ント生活にも、精神的結合にも、
 又余り持ったことのない六、七貫
 の荷を担いだことによつて体力的
 にも自信をつけることが出来たの
 ではなからうか。

全負無事に予定を終えた事をほ
 ぶと共に、もう次の計画に胸をふ
 くらませている次才である。

(筒井記)



才1日(8月4日) 晴

| | | | |
|----|-------|---|-------|
| 着 | 5.11 | 登 | 5.11 |
| 本々 | 5.45 | 渡 | 6.05 |
| 松島 | 7.05 | 高 | 7.15 |
| ↓ | 8.05 | 地 | 8.15 |
| 沢 | 11.05 | 沢 | 11.40 |
| ↓ | 13.05 | 尾 | |
| 上 | | | |
| ↓ | | | |
| 徳 | | | |
| ↓ | | | |
| 横 | | | |
| 尾 | | | |

MEM 筒井・吉野・小林 他一名

前夜近藤、野田さんお二人の見送りを受り出登
 した私達は、無事上高地に着いた。観光客で賑う
 河童橋より焼岳を眺めながら横尾へと向う。

梓川沿いに、スラリと色とりどりのテントが立ち
 並ぶ小梨平のテント村を横目に見て、肩にくい込
 む重い荷に足許を見付めながら黙って歩いて行く
 ・ときどき目をあげると前穂の姿が目につく。

三十分毎に五分休むのを楽しみにしながらも、皆
 明日の穂高の登りと思うのが元氣一杯である。

徳沢を過ぎ横尾までよく踏まれた道を辿る。一
 時横尾着、すぐにテントを張り夕食の仕度で得意
 の腕をふるう。明日は暗いうちに出発するため、

食後筒井と小林とで涸沢への径を辿ってみる。六

時テント着。オ一夜は静かに更けて行
った。(筒井記)

オ2日(8月5日) 晴

| | | | | | | | |
|----|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 着 | 6.05 | 8.35 | 10.05 | 11.30 | 15.10 | 18.00 | 19.45 |
| 発 | 5.15 | 5.55 | 8.20 | 9.55 | 11.25 | 15.00 | |
| 尾△ | 横↓ | 水↓ | 廻↓ | 沢↓ | 線↓ | 稜↓ | 北↓ |
| | 稜 | 山頂 | 山頂 | 山頂 | 山頂 | 山頂 | 山頂 |
| | 奥↓ | 廻↓ | 沢↓ | 尾△ | | | |

目を覚ますと四時半である。予定よ
り一時間も遅れてしまったので朝食は
途中で食べることにしてあわて、テン
トを出る。

昨日の疲れはまだ少し残ってはい
るが、今日の期待が私達を明るくして
くれる。丸木橋を渡り横尾本谷に沿って
涸沢へと急ぐ。横尾の岩小屋を過ぎ、
屏風岩が見え始める頃より沢の流れか
らは次第に遠去かり、樹林帯の登りに
かゝる。早朝の調子の良さにまかせて
ぐいぐいピッチを上げる。屏風岩が尽
きる辺で再び河原に出る。丸木橋を渡

り。路は左岸に移る。此処の水場て小
休止。これより先は屏風岩を半周する
ように坦々とした径を進む。

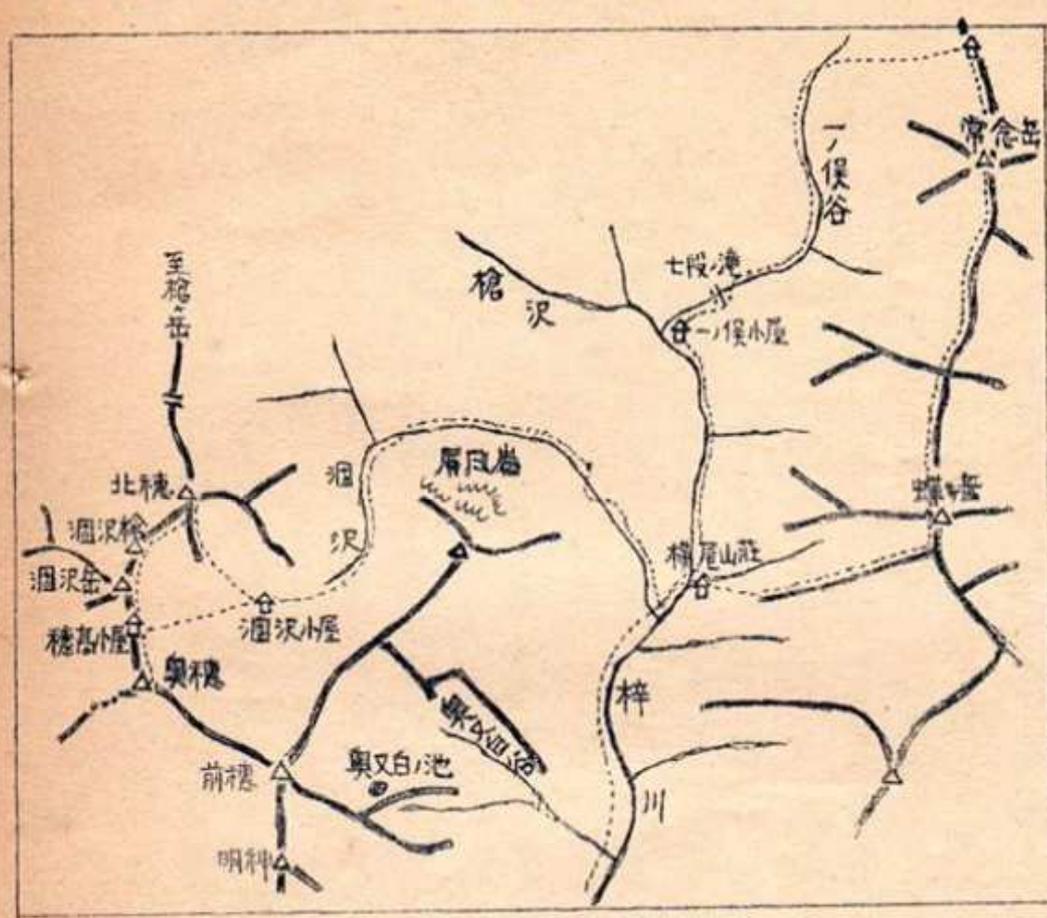
横尾から約三時間で涸沢に着く。河
原には色とりどりのテントが張られ賑
かである。北稜、涸沢、奥稜、前稜の
絶壁や雪渓にこり囲まれた素晴らしい
場処で、感激がぐっと胸にくる。こ
で朝食をとる。

涸沢の雪渓を渡って北稜沢をしばら
く登る。夏の陽をまともに受けて、グ
ン／＼と高度を増す傾斜がうらめしく
なるが、途中で買って来た麥わら帽が
照りつづる陽を防いでくれるので有難
い。三十分毎に五分の休み、腰を下ろ
した傍に、イワカガミがとこも可憐で
ある。キンポウゲの群落もひときり美
しく目につく。眠下には涸沢、前方に
は稜面の岩々、前稜の四つのピークが
印象的である。径は草付の斜面から崩
壊の岩場に変る。処々の岩につけられ
た矢印に従って登ること二十分程で稜
線に出る。一度に展望が開ける。延々

と起伏するアルプスの山々、稜高
連峯のいかめしい姿が雲一つない大
空に連なっており、前方彼方にはこ
の稜線への到着は北稜高岳を控えて
いる。再び急登を繰り返す十一時半北稜
に着く。混雑している頂上を敬遠し
小屋まで下る。此処からは向い側の
蝶・常念の山々みかすばらしい。

更に岩稜と奥稜に向う。小規模
ではあるが岩峰の連続に少し奇異
を感じたが、目的地に一歩／＼近
づくと思ふと歩きにくい岩路も大
して苦にならず、一峰又一峰と越
えて行く。この縦大路の要路とい
われる涸沢稜のピークも無事通過
してはっと一息のいた処で昼食を
とる。北稜と出る頃からガスが少
々張り出し、遠方の山々は姿をか
くしてしまったが、前方に時々ガ
スの隙から顔を覗かすジャンダルム
の岩壁がすばらしい。
夏山の盛況は何処へ行っても支
りないだろうが、稜高は水壁ブー

ムで一戸の混雑である。順番を待って登ったり下りたり状態にはウンザリする。涸沢岳への登り、最後の処に鎖がつけられている。頂上からゴロ石の堆積した道を稜高小屋迄下る。二階建ての立派な小屋である。此処に荷物を置いて稜高まで往復することにする。梯子がかけられたりペンキの矢印がつけられたりした岩場を過ぎ、よく踏まれた径を辿って頂上に着く。稜高神社が祠られその横に大きなケルンが立っている。ガスの去来が激しく視界はきかない。



下りは小屋で休んだ後、サイテングラードを涸沢迄一気に

馳け下りる。稜高の山々は、はや暮色に包まれていた。河原でTさんの作って下ったジュースを飲みながら小休止、暗くならないうちに横尾へ戻ろう

| 着 | 発 |
|----------|-------|
| 横尾 | 5.10 |
| 横尾↓蝶ヶ岳 | 8.40 |
| 蝶ヶ岳↓常念岳 | 13.00 |
| 常念岳↓常念小屋 | 13.45 |
| 常念小屋↓七段滝 | 15.35 |
| 七段滝↓二保小屋 | 17.30 |
| 二保小屋↓横尾 | 18.30 |

起床三時半。昨日も四時半起床のため、この時向の起床はかたまり苦痛である。然し今日も蝶ヶ岳、常念岳の頂に立つことを思うとフアイイトが湧いて来て、早速軽い食

才3日(8月6日) 晴
MEM 筒井・近藤・吉野・小林

と重い足を引きずって急いだが、横尾岩をすぎる頃、日はとっぴりと暮れてしまった。懐中電灯もつけず、足探りのようにして七時四五分、ヤッとテントに戻る。朝出登してから何と十四時間のアルバイトであった。安心と共に疲れが出て、夕食ほど食べる気力もなかった。
(小林記)

事をすませりターと先頭に朔露の徑
と出登する。

蝶ヶ岳への徑は急な登りであるが、
徑に這い出した木の根を足場に登って
行く。早朝の山は全く静かで、時々季
節はずれの鶯が鳴いているのが聞える
。私達の他には誰も登山者はおらず昨
日のコースに較べて静かだ良い。リー
ダーは、ハイキングコースなのだから
休は一時毎にすると言ふ。

睡眠不足のせいだ、目が時々かすん
でくるのは困る。それでも昨日の稜
高のガラ場とは違って、土というもの
、暖かだ。懐しさが靴の底を透して感
じられる。黙々と踵に力を入れて登る
。時々木の根から洩れる陽の光が私達
を歓迎してくるようだ。

やがて樹林帯を抜けると、緑一色の
ハイ松が一面にピロロドの絨毯を敷い
た林にあこやかである。この辺からガ
ラ場となり五分程で稜線に出る。こゝ
で二、三のスナップをとって一気に頂
上まで登る。三百六十度の展望、北ア

ルプスは飛く眠の前に用かれています。

三月に雪深い吾妻耶山の頂に立って
残雪の谷川連峯を仰いだ時の感激を想
い出しなから、今ニ六六四米の蝶ヶ岳
に腰を下し北アルプスの山々を心ゆく
まで眺める。すでに私の心には山の苦
しさはなく、さびと山の美に対する讃
嘆で一杯であった。数多くのケルンが
山の芸術の林にあちこちに積み重ねてい
る。一パーティが携帯ラジオから流れ
る音楽を聴いている。

左手に氷鞍の優しい稜線が描かれて
いる。雲海が静かに流れて何処までも
その上を歩いて行けそうな気がする。
昨日登った稜高が、その右手に裾が、
そしてこれから登ろうとする常念岳が
ピラミッド型にスマートに見える。

蝶ヶ岳から砂礫状の徑を鞍部まで一
気に下る。一面に咲いているお花畑が
更にきれいだった。実は稜高のお花畑が期
待はずれだったのだ。こゝはそれ程期
待していなかっただけに、登ることだ
けで一杯であった私には望外のさびで

ある。こゝで小休止。

いよ／＼常念岳の登り。花崗岩
のような石壁でざら／＼しているの
で登り易い。再びあたり一面ガスに
包まれ、殆んど展望のまかなくなっ
た中を、頂上直下まで来る。こゝで
昼食。どうも固型物は余り食べたく
なく、飲料水の方か主となる。

頂上へ。頂上には我々の他に一パ
ーティのみ。展望も殆んどまかはない
ので記念撮映をしたばかりで直ぐ下り
にかゝる。登りの時と違って歩みに
くいガラ場となり、この頃になると
足の屈伸も情性で動いている林も
のである。やっと常念小屋に辿り着
く。(濃いガスのため小屋がながな
が見付からなかった)

小屋の人に徑を聞くと、気をつけ
て行く林に、と注意される(この時
は大して気にもしないで聞き流して
しまったが、後になってこの言葉の
意味が介った)。一ノ保への徑をど
ん／＼下りやがて沢に出る。滝が非

常に多く、夏の炎暑も忘れて滝を眺めながら谷を下る。しかし涼を樂しんだのも東の雨、冷汗の出る様な難所に出会い、私にとっては今までにないアバシチュールであった。

足の痠痛もようやくおさまった頃、一の俣小屋に着く。こゝで空腹を満たせうと麵類を注文する。品切れとのこと、仕方なく重い足どりにてテントへ向う。

横尾の林道へ入る頃は今日も又すてに日は没し、梓川の流の音だけが私達を力づけてくれるかの様に、今日も絶之向なくひびいてる。

テント場の灯を見出したときは本当に嬉しませて一杯になる。横尾山荘で待望の信州そばを食べ、皆満ち足りた顔で山荘を出る。今日の無事を祝福してミルクで乾杯、十時就寝する。

(吉野記)

才4日(8月7日)

| | 着 | 発 |
|-------|-------|-------|
| 横尾 | | 6.30 |
| ↓徳沢園 | 7.55 | 8.15 |
| ↓白沢渡 | 9.00 | |
| ↓明神小屋 | 9.07 | 10.00 |
| ↓上高地 | 11.00 | |
| ↓大正池 | 12.40 | 13.53 |
| ↓大正池 | 16.00 | 16.05 |

頂上石

山彦

徳本を越えて帰るといふ業もあったが、勤めを控えている者もあり、のんびりと上高地を見物し身体を休めながら帰ろうというこじこじになった次第である。上高地近辺の俗化ぶりには今更ながら驚いた。

—以上—

これは北岳　これは塩見
このちっぽけなのは赤石
細長いのは　聖
そしてこのでかいのが光

.....
壘の上に並べられた頂上石は
何の変哲もない石ころであるが

雪と氷に覆われ
雨と風に打たれ
陽に鍛えられて
三十米の高みに生きて来た石
訪れる人も稀れな
最奥の山の頂に眠っていた石

一つ一つに
自然の長い営みと
私の小さな営みとが
交錯して映っている

今　お前うを積んでやろう
小さなケルン
下界のせい多き生活の中での
私の並しるべとして



山と星

辻 宏 視

午前三時、夜行で大空を登ってやって来た丁さんとYに起こされてテントの外に這い出した。丸首シャツ一枚ではさすがに寒い。腕を組み合せ、肩をすくめて、反射的に空を仰いだ。稜線と立木によって区切り僅かに残った谷川壱八月の夜空には、星かひしめき合っていた。そして例によって次の句をひよっと思い浮べた。

乗鞍のかたは春星かぎりなし — 前田普羅 —

乗鞍には行ったことがないけれど私はこの句に深く感動する。又山で星を見るのは春とは限りはないけれども、いつもこの句を想い出すのである。澄んだ高所の空気をスバリと言ひ取った立体的な名句である。

飽かず眺める夜空の中央に、スバルが互に緊密な糸で結はれていく如く、互に何かを言いかわすか如く、青白くチカ／＼とまた、いていた。この小さな六つの星は枕草子の「星はスバル」と案くまでもなく、ほんびこにも宛てられる星である。上代ではこれを珠飾と見立てたそうは、天文詩人テニスンは白銀の綱にからまる一群の螢と言っている。いすれも、余りにも的確な表現ではない

だろうか。

露けさに昂^{スバル}の諸星辨別す — 山口誓子 —

秋大気が澄むと、これらの星は露の珠の如くにきらめきながら一つずつは、きり見之るのである。谷川壱に見上げるスバルも明らかに弁別して見之る、山の澄んだ靈気によるのだろう。それとも空の奥はすでに秋なのであろうか。

そして冬

茫と見え又ひとつずつ寒昂^{カスガレ} — 山口誓子 —

冬の荒い大気の流にこれらの星は大きく息つく。そして木枯がとだ之ると泣き濡れたようにうるむのである。

星は山と海にはなほ縁が深い。どちらも重要な道案内の役をしていくからだろう。ふと、星は山の星、海の星と介けられるよう気がした。

荒々しいシリウスなどは海の星のようだ。紅い星アンタレスは山小屋の灯の赤な暖かみがある。オリオン座は海上に一杯張り拡がっている方か立派だ。大熊座などは暗い谷間からふり仰いだとき、しみじみとした親しみを感じる星だろう。白鳥座、ペガサス、カシオペアと思いをめぐらせていると、赤い筋雲が流れていくのかかすかに見えた。夜明けも近いのであろう。

露けき身いかはる星の司どる — 山口誓子 —

作者誓子は、もし自分の運命を司どる星と違ふとあれば躊躇なくスバルを違ふと言ったと伝之られている。私に

若しその自由が与えられたら、船にのって真夜中のウツツチに一人立つ自分をマストの上から見守る星、山にきてテントの中にもぐり込んでいる自分を木の葉の間から

谷川岳南面

オヂ力沢

辻 勝四郎

八月三日(晴)

MEM 辻勝四郎 他一名

幕岩Cフェースが曙光に輝き始める
六時、二俣を登つ。

魚の滝、右壁を快適に直登、オニの滝、中段より右手にからんで沢に戻る。暫らくは連続する滝の左右のストラブをへずり、やがて前方にぬじれの滝の飛沫を望んで右岸の沢身より三、四十米上をトラバース。この辺沢筋を辿るよりも数段悪く、足元は断断なく崩れ、落石頻々、草は不安定。ぬじれの滝よりそのまゝ、右岸の草付と藪の中を捲く。ぬじれの滝上部にはまだ雪渓が

続いていて、朝の陽はもう深く切れ込

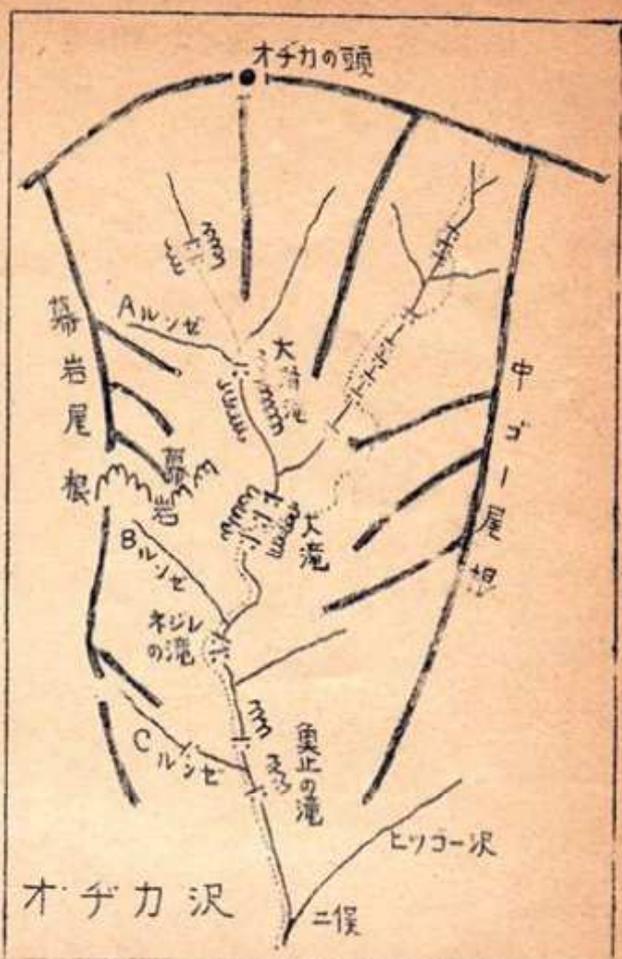
んだ沢床まで射し込み始めて、白く光るストラブの反射光で沢筋は夏本来の逞ましい生気を蘇みぐえらせていた。

先行パーティーが右岸の黒く光るストラブを臆々と這い上って行く。その彼等の後姿から目を上げていくと、晴れ上った青空と割する彼方に青黒く屹立する幕岩の一連の壁があった。

雪渓が消えるに両岸は急に狭まって、衝立した両壁の前方に大滝の落口が見えてくる。今日の大滝は、右手の流に沿うルートは水が多い為条件が悪く、左壁は乾いているが、一気にザイルなしで四、五十米稼ぐにはSの技術が不安だった。沢に戻れないかも知れぬという不安はあったが、今日の我々には完全なザイル確保の奥から、滝より少し離れた乾いた右壁を登る外手はな

った。

三十米一ピッチ、中間の柵に出ても後続のSを確保する。朝方、魚止の滝附近でもたたくしていったパーティーがようやく滝下に姿を現した。次のピッチ、下部が思いの外悪く、傾斜のや、ゆるいこまかいスタンスを持つので、ペリした壁を強引にとび上るように登らなければならぬ。Sはこの壁を登れるものだろうか？ そんな躊躇の後、思い切った反動でへばりついていった壁から解放されてようやく足場のしっかりした壁の側面に出た。その時だった。それは全く思いがけない出来事だった。何気なく振り返った私の目の前で、後続パーティーの先頭者が、あたかも巨大な滑り台をすべる杯に大滝の流の横を物凄い勢で滑落し視野から消えて



いった。茫然たる一瞬の後、我にかえ
 って岩から降り出すと大声で「どうし
 た！大丈夫か！」と連呼したが、その
 声は十五米程離れたSにも届かずに滝
 の音に消されていた。しかし捨て縄も
 持ち合せない自分には、いくら滑落者
 の安否を気づかっても、ザイルなしで
 この壁を下るのは容易ではなかった。
 現在の自分に出ることは、見通しの
 大きく一段上のテラスに登ることだ。た
 。墜落回車のショックから受ける、背
 後に引きずり落とされそうなる錯覚と斗

いはから、ザイル
 が一杯にのびる高
 みに出たとき、再
 び滝下のパーティ
 の群りを認めた。
 男は意外にも無
 幸であった。滑落
 の一部始終を見つ
 めていたSの話に
 よって、彼が三十
 米も一気に落ちな
 がら幸にも滝壺に

落ちこんだ為、殆んど傷を負ってもし
 ないらしいこと知らされた。その時
 、今まで忘れていた暑さが身体によみ
 が之って来た。それは咽喉の焼けつく
 ような、全身を汗だらけにする暑氣の
 ない暑さだった。

次のピッチで藪の中におどり込んだ
 。草鞋の裏に感じる冷え／＼とした土
 の柔かい感觸が無性に轟しかった。私
 達は暫くは樹にもたれたまゝ、目の前
 に展開する幕岩のきり立った壁を茫然

と眺め続けた。

本格的な藪漕ぎが始まった。
 意外にもこの藪の中には細々とした
 踏跡が続き、オカンの跡もあり
 と残されていたが、固もなくそれも
 消えて全くのヤブの中。上越特有の
 あの抵抗の激しい執拗なヤブ漕ぎが
 続けられることになった。

沢を高れて四時頃、もう汗も出な
 い。時々ヤブが切れると身をのり出
 して沢とのぞき込んでみたが、沢
 に戻れる箇所はなかった。処々に実
 を結んでいる木莓を口に抛り込んで
 は歩き続ける。

ようやく開けた小尾根に出る。意
 外な程、沢は身近に流を見せていた
 。全く足かかりのない草付に一步一
 歩ハンマーでステップを刻んで沢に
 下る。振れ切った体には一片のパン
 も思ふ林には咽喉を通らない。潮行
 記録を見ないこの正面の沢は、見か
 けよりもほるかに悪かった。丁度一
 の倉四ルンゼの傾斜を落した林は、

兩岸の狭まった沢筋には、チムニー状の水量の多いニ、三十米の滝が幾段にもか、つていて、直登は大変なアルバイトであろう。ヤブ漕ぎからくる完全な体力の消耗に、右壁の傾斜の急な草付の斜面を延々とトラバースする。途中下降吳を見付けて一旦沢に入り、次いで左岸の草付をまく。

間もなく沢が三介して、広いピロート敷いた林床源頭はまだ長く続いていく真中の沢に入る。未だルンゼ状に喰い込んでいる沢筋の潮行は相当に困難と見て、石スラブを捲き出したが、トラバース悪く、またシヤクナゲの物凄いき傾斜のヤブの中に入り込んだ。もはや先刻のヤブ漕ぎで腕に力が入らない。こんなことならミツ道具を使ってでも沢への下降を開始する。だが降り立った地臭から上部はもうそれ程ひどい悪場はなかった。チムニー状のいくつかの滝を、両手両足を突っぱりながら通過する。そのいくつめ

かのチムニーで、下壁にも何気なく觸った大きな岩がズツと滑ったかと思ふ間にスラブの上を轟然と落ちていった。臍間下にはいたSは劫よく左壁へ体をかわしたが、砕けた頭大の石かまどもに彼の臀部へ飛んでいった。スラブにはね飛ばされた彼のズボン、ズタスタに裂けていたが、それは全く不幸中の幸だったろう。脅以外の何処に当っても、彼はもっと致命的な傷を負ったに違いないのだ。

もう何時に稜線に出られるか見当もつかなかった。谷底から舞い上って来たガスの去来する幕岩が、お伽の国の悪魔の塔の柵に一戸無気味な林相を呈して来た。筋肉を痛めたSはもう満足には動けなかった。連続する滝を彼はザイルを頼りに足をつっぱってゴボウ抜きに登ってくる。「ひょっとすると今日はオカンかも知れない」そんな情ない気持ち払い除けるように、一つ一つ滝を登る毎に次の滝を目で追っては

「あれを越之ればガレたろう」
「今度こそガレになる」とSに言うよりも自分に納得させながらなおも岩に登り続けた。

思いがけず、そこが縦走路だった。跋を引きながらSは黙々とヤブの中を登って来る。「よく頑張ったね」。手を握り合うと急に胸の爪から熱いものがこみ上げて来る。一り念や幽の沢を登っても、いや今迄のあらゆる山行を通じて、自分にこんな感情が襲ったことがあったらうか。「尾根登っていいなあ」。Sかほつんと言った。

一面に立ちこめた煙を濡らす濃い霧の中で、私達は暫らくは黙ったまま立っていた。



ヒツゴー沢

八月七月十三日 (曇)

MEM 神沼博・小林敏子

小林敏子記

水上駅に降りると雨がしとく降っている。来る筈の辻さんは見えない。この天気ではと少々ためらったが、ともかく二股までは、と出発する。途中で彼から来たタクシーの乗客(登山者)がわざと車を停めて私達をのせてくれた。谷川温泉から懐中電灯を頼りに単調な歩みを続け、あたりが白みかける頃二股に着く。雨は上がったか空は薄黒い雲で覆われている。朝食をとった後出発。左にオジカ沢を見送り、河原を転石伝いに進むと、厩も行く所、続いて巨ヶ澤音をひびかせて落ちていく。連日の雨に水量は豊富である。始めの滝場に一寸不安な気持ちになったが、右手水際を登って無事通過する。巨を過ぎると沢も次第に明るくなり、滑めと小滝の連続となる。廳がれた

岩床、鏡のような水の流、すばらしい自然の造形に、固くはなっていた気持ちがほぐれてくる。Fいくつだか介らなる程数多くの滝を、或時は肩の助けを借りたりして次々に慎重に登る。もう沢歩きの楽しさなどというより、スリップしない格に懸念になる。

向もなく行く手にや、大きな滝が現われる。これがヒツゴー最大の要場と言われているF17らしい。左岸、右岸とも一寸手強そうなので高懸くことにして左手の草付を登る。取付は短い草の急斜面で苦勞させられたが、更に少し登ると灌木地帯に入る。余り上へ行かず右へトラバースすれば良かったのだが、私達は登りすぎた。たうらしく、沢へ戻るのは大変なアルバイトだ。と介って、いそいでのこと中ゴー尾根へ出ることにした。(同じような人が時々いるらしく、ヤブの中に踏跡や、枝の手折られた跡が続いていた)。こ、は落口まで入って直登するか、捲くなら滝のや、手前右手のガリーを登った

方が良さそうだ。

悪戦苦闘の末、ようやく中ゴー尾根に出、ほっとする。天気も次第に回復して来て、今登って来たヒツゴー沢、目を転ずればオジカ沢の勢がら連なる岩稜等々長く見える。尾根を辿って国境稜線に出、十時頃谷川岳頂上に着く。私達の他に一人しか湘行者のいなかったヒツゴー沢に較べ、肩の広場あたりの余りの賑わいに驚く。肩の広場で昼食、のんびりと昼寝をしてから、巖剛新道を径で土合へ下る。対岸の白毛川、朝日の山々が懐しく眠に映った。

| | 着 | 発 |
|-------|-------|-------|
| 水上 | 2.24 | 2.30 |
| 谷川温泉 | 3.00 | |
| ニ俣 | 4.00 | 5.05 |
| F1 | 5.20 | |
| 国境稜線 | 9.30 | |
| 谷川岳頂上 | 10.20 | |
| 肩の広場 | | 12.15 |
| オジカ沢 | 14.40 | |
| 土合 | 16.50 | 16.54 |

宿合岳川谷

8月16日-18日

一の倉・一の沢

一の倉沢集中(退却)

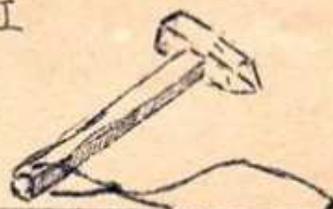
白毛門をめぐる沢(その2)

ゼニイレ沢

白毛門山

《参加者》

| | | |
|------|---|-------|
| 柿沼博 | ・ | 辻勝四郎 |
| 吉田泰彦 | ・ | |
| 辻宏視 | ・ | 山崎弘一 |
| 亀江資之 | ・ | 斎藤良則 |
| 篠原健二 | ・ | 高須賀重行 |
| 滝沢広保 | ・ | 吉野富子 |
| 辻藤澄江 | | |



一の倉・一の沢

〔日〕八月十六日(雨後曇)

MEM 辻(勝)・吉田・辻(宏)・

亀江・斎藤(良則)・篠原

・滝沢・高須賀

|| 辻宏視記 ||

合宿才一日、辻(勝)リーダー以下八名で一の沢溯行を行う。

未明三時頃の満天の星空にじきか之、夜が明けてみると天気が悪く、マチガ沢旧道出合のベースキャンプから一の倉へ旧道を辿る途中ではヤ雨に叩かれ、幾度かの逡巡の末一の沢出合に着いたのは八時十分であった。時間もおそいので早々に沢に入る。

今年の夏は、北ア、南アの大きな山行と、例年の通り谷川岳合宿との二本立ての計画が立てられた。後者谷川岳合宿は、大きな山行に参加する余裕のない人のためという意味と共に、基礎技術の習得が狙いであった。前者の山行と合宿とはかなり期日をずらせておいたのではあったが、やはり両方に参加するには困難もあり、合宿参加者が始めの予定よりや、減ったこと、又二日目の一の倉集中は二、三、四ルンゼに分れて登る予定であったのが、南稜テラスに着いた途端、真正面の中央壁登攀中の一登山者が宙を飛んで墜落するのを全無もろに目撃し、しまった為、その日の登攀は中止せざるを得なかったことは残念であった。

然し、その翌日は会として前から話題になっていたゼニイレ沢を登り、白毛門沢に続いて白毛門をめぐる会として、二番目の沢を紹介出来ることは、今回も無事

故て合宿を終ることが出来たことと共に喜びたい。

て小滝が連続して現れる。朝の雨のためか岩は一面に濡れており、水量も多いようだ。ヤがて一五米程のトヨ状の滝にぶつかる。水を浴びるので直登は敬遠し、右の草付から越える。とすぐ上の六米ばかりのチムニーを一パーティか盛んにアタックしているのに出喰わす。トップが左壁から取り付き、途中のバンドを右にトラバースしようとしていたのだが、バンドの上にハンクした岩があり、それを回り込めずに苦勞している。下で確保している連中に、リーダーが岩を抱え込んで回るよう助言したが、余計なお世話と言わんばかりの顔をされる。一体に岩登りの連中は自信家で他人に教わることを好まぬようだ。辻さんは待ちきれずに左手の草付を高捲きによく。連中がハーケンを岩の根元にうち込んでどうやら回り込んだ頃には、辻さんはその上のチムニーも越えたテラスで、我がパーティの首尾如何と高見の見物である。吉田が前のパーティと同じルートに取

り付く。すると若手がしびれと切らせ、右壁に取り付いた。困難と思われ、右壁が意外に良いので皆もそれに従う。斥も小滝を越してゆくと一の沢才一番目の悪場と称せられる滑滝にぶつかる。滝の右下より上にクラックが入っており、チョックスストーンも詰まっている。リーダーに早くしろ早くしろと言われながら、アンサイレンしてもち、で我武者羅にクラックを上へと抜ける。次いで五米滝、十米三段の滝、八米のチムニー、大石の詰った滝と息もつかせぬ登りを皆至極調子よく越之れば、いよいよ一の沢最悪の場が現れる(ガイドブックには出てはいないようだ)。即ち上部に大きなチョックスストーンを持った幅広い十米程のチムニー状の滝で全体にぬるぬるしている。左手は上部のトラバースが悪そう、直登が右手の捲きである。前のパーティも此処で詰っていた。時計は十一時二十分、ご飯にしようかしとリーダーの提案、この悪場を越えてからにしましょう、と

私。知らぬとはい、なからい、気分ものであった。悪戦苦闘の末滝の上部に出たじきはすてに一時に近かったのだから。

我々が飯を喰っている、例のパーティが滝と九十度方向の右手のクラックに登り始めたが、三十米位登って又考えているようである。チョックスストンの裏を潜っての直登も出来るそうだが、スマート斥御仁に限るようだし、むしろ濡れになるので、我々も前のパーティの後を追って、上部は行き詰り、左手をトラバースするにも足場が悪い。結局二、三米下って僅かに走っているバンドをザイルを使ってトラバース(これが一般ルートらしいが発見しにくいので注意)、草が終り灌木の中を斜めに登り再び角度が変わった処で一吋ヒヤヒヤする。ホールドが無く、スタンスも僅か足半分という所で、下は滝の下部まですばっと切れ込んでいる。我々の

へッピリ腰に、リーダーしきりに齒が
 中がる。その角を回り込んで滝の上に
 出る迄のトラバースが又一苦勞。サイ
 ルを両方で確保して渡ったのだから落石
 を起こし易い。中にはホルルト、スタ
 ンスが崩れて宙吊りになる者も出た。
 とにかく沢に戻りほっとする。十二時
 五十分である。小休止の後出発、十米
 程の、チヨックストーンを持ったナムニ
 ーを右手の水に濡れたスラブを越えて
 越すと、もう水もなく堆石が続く。こ
 れを詰めて藪に入り、ヤゴてガスの立
 ちこめるシンセン尾根へ首が出た。三
 時二十分であった。

なお、技術的なことと詳細なルート
 図は「溪稜」オ五号夏山報告特集に
 詳しい。

一の沢出合 8.10
 ↓
 チヨック
 ・ストンのナムニ 11.20
 ↓
 最後のナムニ 13.30
 ↓
 シンセンのコル 15.20

一の倉沢集中
 近藤澄江

八月一七日

MEM 柿沼博・辻勝四郎・吉田泰
 彦・辻宏視・山崎弘一・亀江賢之・
 齊藤良則・條原健二・高須賢重行・
 滝沢広保・吉野富子・近藤澄江

朝七時半総勢十三名賑々しく暮管地
 を後にする。今日の予定はAルンビ、
 Bルンビ、三ルンビ、四ルンビの四パ
 ーティに分れての一の倉放射状登山で
 ある。雪の少ない今年には既にヒョウナリ
 の滝が顔を出して、右岸の藪の中の
 捲徑をとらなければならぬ。松の木
 の下降泉ではカイル二本をつないでア
 ツホカイルンで雪渓に下る。多勢パー
 ティながら落石の事故もなく全員つ、
 がなくエボシスラスラを登りつめて一の
 倉の展望台南稜テラスに着く。

滝沢下部に十名近いパーティが取付
 いている。汗を拭いながら彼等の登は

ん振りをする時だった。突然
 Kさんの「人が落ちる」という上ア
 った声に皆が一斉に振り返ってKさん
 の指差す奥壁の方に眼を向けた。そ
 の時私達はかつて至験した事のない
 思い掛けない事実を目撃したのであ
 る。それはまさしく人阿であった。
 あっけにとられた私達の眼の前で両
 手足を大ウ字に開いたものはや一個の
 物体と化した一人の登山者が中央壁
 と三ルンビの中向リッジの三百米の
 高みから何回かバウンドし回転しな
 がら緩やかに落ちていった。その視
 覚に続いて物薄く落石の反響がしば
 らくの向一の倉を包んでいた。我々
 はリリークの遠断によつて今日の登攀
 を中止。二、三名をテラスに残してた
 だちに本谷バンドに急行した。男は
 即死であった。直に警備隊への伝令
 がとび、犠牲者は一ます四ルンビ下
 滝の上で岩にヒックスされた。

同もなく登山の良識に従った延マ
 と続く登山者の退却行が始まった。

白毛門をめぐる沢(その2)

ゼニイレ沢

亀江資之

八月一日

MEM 辻勝四郎・柿沼博・吉田泰

彦・辻宏規・山崎弘一・亀江資之

| | | | | | |
|----|----|---|---|---|-------|
| マカ | ガ | 沢 | 出 | 合 | 7.50 |
| 旧 | 通 | 合 | | | |
| ↓ | ニ | レ | 出 | 合 | 8.10 |
| セ | | | | | ~8.20 |
| ↓ | ニ | 股 | | | 9.00 |
| ↓ | ニ | 積 | | | 12.00 |
| ↓ | マカ | ガ | 沢 | 出 | 13.05 |
| 旧 | 通 | 合 | | | 15.50 |

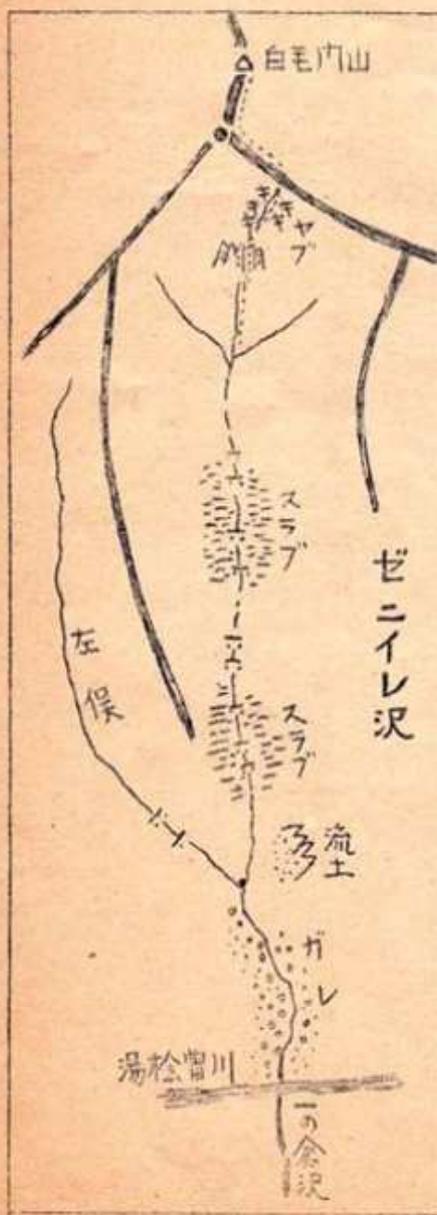
湯檢曾川を挟んで一の倉沢と相対するこの沢は兩岸を藪に囲まれながらも上部はずっとスラブが続き、一の倉岳あたりから見るとかなりの滝をかけた急峻な林相を呈している。ゼニイレという名前は一の倉岳の尾根にある浅間神社で一の倉沢にお賽銭を投げると、丁度対岸のこの沢に入っていくように見えるところから来ているそうだが、案内書にも紹介されておらず、我が会と

して白毛門をめぐる沢を一通り調べてみようという今年度の計画もあったので、合宿才三日目はこの沢を登ることにしたのであった。なほ、ニ股から先左俣は稜線までの藪が長くルートにはなりそうもない。

出合からしばらくは水流もなく、白っぽい苔の附着した浮石のゴロくする歩みにくい登りである。やがて細々とした流が現れ、体にびっしり汗をかき、二股に近く、此処で一息入れ、この沢で唯一のケルンを積む。振り返ると一の倉の雪渓を始め、隣りの幽の沢の白い壁がくっきりと見える。此処

から見ると烏帽子スラブは驚く程急に見え、昨日のことが悪夢のようになり出される。

一服の後、右俣に入り暫く行くとも水量もいくらか増し、いよいよ、スラブとなる。岩は赤黒く、一見して滑りそうである。慎重に取り付くが、幸にこの辺の草は割合しっかりしており頼りになる。滑状のスラブを一気に七、八十米稼ぐと、十米程の棚にぶつかる。リーダー早速直登にかゝるが岩が滑り易く、上部に直登はホールドもなくや、苦勞する。そこで他の者は右手のヤブを捲き棚の上に出る。沢はますます明るく開け、

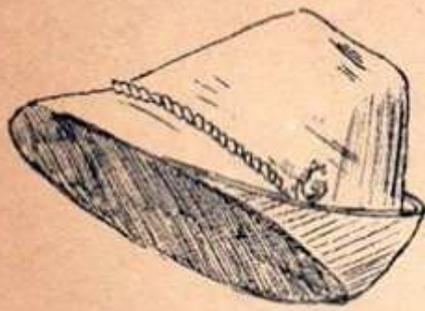


ゼニイレ沢

沢は三介される。真中の沢をなお暫く詰めると水は涸れ、一寸した藪となる。簡単に之を抜けると目前に一寸したバットレス状の岩壁が行目をささぎるが、之はサイルを使うこともなくや、緊張して乗越す。

いよ／＼大詰め、本格的な藪漕ぎとなる。何しろ人が入らないから踏跡なんてものは全くなく、灌木と熊足がびっしりと詰っていて非常に消耗する。これを右にトラバース気味にかき分け、かき分け行くと二十介程で縦走路に飛び出した。

尾根を登って来た女子の隊が丁度やってくるころであった。



白毛門山

吉野富子

八月十八日(晴)

MEM 近藤澄江・吉野富子・篠原

健二・高須賢重行・滝沢広保・他一名

昨日一の倉で生々しい遭難を目前に見て、一同かたりのショックを受けた。私も今朝は何となく足が重いのて、今日はのんびり尾根を歩いて白毛門に登り、ゼニイレ沢を溯行する。パーティと上で落ち合うことにする。

先登のゼニイレ隊を見送った後、八時ベースキャンプを出発する。朝方の雨も止み、青空が広がって、群青の空に上越の山々が徐々に姿を現してくる。土合の橋で湯松曾川を渡り、東黒沢の橋を越え、向もなく樹林帯の中の急な登りになる。昨日の烏帽子スラブと異り、土と枯葉の混った弾力性のある径と、他に登山者もなく、自由に歩き

、自由に休み、拘束されずに登って行く。こころ山行もたまにはよいものだ。

陽光は容赦なく山肌を照りつけ、稜線に出ると目が痛い程である。その暑さをよそに、赤トンボが秋の訪れを知らせるように飛んでいる。谷川岳東面が手にくるように、マチゴ一の倉、山の沢の雪渓が暗い岩壁に挟まれて白く輝いている。丁度一の倉の雪渓の所で、昨日の遭難者の遺体引下ろしをしているのが黒くすすかに見える。あの大きな急峻な岩壁に対して人間の何とちっほげなことか、それでもあの壁に、今日も明日も絶えることなく憑かれた若者が惹かれて行く。確かに、複雑な人間関係、文明に遠いまくらに居る近代人にとってこの岩場は、人を惹きつける何ものかがあるようだ。

やがて頂上の岩が見え、急に足も軽くなる。頂上直下で男子六名のゼ

ニイレ隊が最後の奮斗をしている姿が小さく見える。私達も負けてはならぬといと一気に頂上までピッチをあける。すでにゼニイレ隊が先に着いていた。頂上の少し下の岩の上で食事をとする。豊富なる水場に恵まれ、充介咽喉を潤す。じょうく、空は灰色になり、谷川は暗い空の下で不気味な岩肌を見せている。一方武尊山の方はまだ明るくスマートな稜線が眺められた。

男子と一諸に尾根谷を土合に下る。湯掛川へ出たのが二時五十分であった。



山と危険

山彦

あの高い峯の上に立ったらどんなに素晴らしい眺めだろう、この谷をつめて上に歩いたらどうだろう、こういう未知への憧れは登山の素朴な要素であり、どんな低山にも又困難な登山にもあるものである。然し山人にとって山へ行く要素はそれだけではあるまい。山という場で始めて自然の兒としての自己を認識し、思索し、或は自己の弱さと闘い自己を深めて行くというか一種の修行者の要素があるのではないだろうか。

だとすれば、バスが入り込み道が切り開かれ、ペンキの矢印がべたべたとつけられ、鎖や梯子がかけられ、楽しむためのだけの大勢の登山者がぞろぞろとやって来る山から山人は次第に駆逐される。人の少い更に困難な危険の多い山に、人の未だ危険な時期に入って行くようになるのは自然の成り行きではないだろうか。

山で死んではならぬ、と私も思う。然し我々が山へ行くことが多ければ多い程、死ぬかも知れぬ危険も多いのは動かし難い事実であり、それでも君は行くのか、と言われども、行かざるを得ないのは山人の悲しい運命のようなものであらう。つまらない死に方だけはしたくない、とは言うもの、優秀な立派な山人達がどうしてあんな短気で思われるような遭難をしている例が沢山あることも知っている。

たゞ私は最近若い人達に多い山での死に対するヒロイックな見方と、技術にまかせた一心を忘れたような山への挑み方は危いと思う……山を単なるリクリエーションの楽しみみの場としは見ない人達に大きな不満を持つと同時に……

「仲間を語る」

管野達也君



〈その一〉

吉田泰彦

最近彼は転居した。同じ大室でも西へ移動したのである。杖父に、いや山に近づいたのである。友よをばである。こんなことを書くとき彼はほやくかも知れない。生活の主体が都会にある以上、少くとも住居は駅の近くになくては不便である。だが然し、取返二十介の道のりで遠い山なみを眺めながら朝に夕に林々な思考を繰り返すことが出来るならこれ又良かろうというものだ。

彼の山荘も又すばらしい。山へ足を踏み入れてかれこれ十年にはなろう。生来の敏捷さとリーダーシップは彼をピラミッドの頂上に押し上げる。それが一の倉や幽の沢の登攀となる。それに彼は又人の面倒を良く見る男である。

「管野さんはまめですね」という声は彼を知る誰もが言う言葉である。まめでよく動く彼は、登山を安く合理化する方にも才秀けている。取のベンチで夜を明かす流行を作ったのもそのデイオールは彼であり、山に夢をノの大蔵大臣ばりのスローガンも彼の発案である。いうなれば物理学専攻の合理主義がプチブル的登山を追放したのである。合理主義の上に立てば、どうしようかという動搖もない。都合悪いれば合宿にも参加しない。……とかく両方に頬を立てたがり、あじくの果てはい、加減な結果に終りがちな我々は十分學ばねばならないようだ。

一の倉南稜をやった時、彼は山果たヒローティション固答をやっていたことを思い出す。岩から落下する水流を山の美一方で解決する我々にとってそれは一つの驚異である。

そうこうするうちに彼もファイアンセをもつべき年令に達した。三十男の売れ残り、もしくはそれに準ずる輩をし

て羨望の的となるやも知れぬ。山に行つて「おーい」と呼ぶと、彼に並ぶ彼女が美しい手を振るかも知れぬ。オニの人生のスタート台に立とうとしている君よ、山を忘れるな。というのはいかゞを忘れるなということだ。多幸を祈る。



〈その二〉

図張勇造

どちらかと言うと無口で大人しい会員の多い我会にあって、彼は少々異色な存在である。彼の性格は良く言つてファイトのある積極的な自信家、要く言へばアクの強い自我の持主とも言えようか。それは我会のバックボーンであるYさんなどにも一脈通ずる理工科出身によく見られる典型であろうし、その良い意味で断り切つた合理性や、自分の主張は

絶対に譲らないという心の強さが、物事にとかく無頓着な、その癖妥協性の強い我々には少々肌違いなものを感じさせるのだろう。彼の性格の良さ、人間の良さというものは、長いつき合いを聖ないとなか／＼人には理解されない。

彼は当即では珍らしい人一倍の親孝行者であり、又まめ／＼しい世話好きである。山に出掛けても必ず土産物と忘れぬのはまだしも、山から水を持ち帰っては「これはどこそこの沢の水、これは何々山の水」と言ったり、やさしい母親に飲ませるといふのを痛くに及んでは、我々は唯々その考行振りに舌を巻くものである。

又彼は卒業後もYなどと一緒に良く現役の世話をした一人である。その行動力、技術、指導力、世話好き等から見て、我々にあって彼程リーダーの資格を具備している者は外には見当らない。

我々がこの上彼に望むものは、より大

きな包容力と、豊かな柔軟性ではないだろうか。



〈その三〉 多言居士

大体人間の性格などというものは、その当人にさへ良く分りぬもので、まして他人にさう介る筈のものではない。三文映画の善玉、悪玉ならいざ知らず、TO BE OR NOT TO BE...と迷う処に人間の人間らしさがあるのであり、例へば私が彼を合理主義的人間であると言つたとしても、それは我々が見聞きする彼の言動の一端から彼の性格を推測して、さういふ要素も彼の中にあるし、そしてかなり強いのではないかに見えるだけのことで、彼自身にしてみれば合理的と非合理的の間にあってやはり人並みに悩んだ末に、合理的の方を比較的多く選んでいるのであろう。

然しこんなことを言っているのは仲間を語るのも容易でない。まあとにかく

我々が他人のことを、何々であると言ふのは前記のようは意味であることをご承知願うことにして、……

彼は優越感居士である。負けず嫌いである。スキーを少し許りやる運中には天狗が多いが、彼もその長である。又よく喧嘩する。車中こうるさいパーティを喧嘩りつづけるのはともかく、岩場を登り下から、稜線の馬鹿とやり合うこともある。正義漢である。彼の主張は常に正しい。然し、彼の主張と反することややはり正しいことがあるように、我々に思える時がある。処が彼にとってAは正しいなら非Aは正しくないのだ。彼を合理主義的と呼ぶ由縁である。彼は誠実である。そして世話好き、特に女性に対してである。その彼が、山と現役の社会生活とを如何に誠実に合理的に処理して行くか。我々の期待に充てて欲しいものである。

|| 白毛門をめぐる沢(その3) ||

松の木沢

篠原健二

白毛門をめぐる沢は、我々として既に白毛門沢、ゼニイレ沢が進行され報告されているので、その後進行された松の木沢について簡単に觸れておこう。

松の木沢については、会報第八号の白毛門沢の稿に於いて、山果氏が「松の木沢は土地の人がゼンマイ採りや伐採に入った僅かな踏跡が湯檢曾川左岸についているが、棚も無く余り面白い沢ではない」と記しているが、地元の人に聞いてみると、彼等が入っているのは雪沢の續いている浅雪期である。

実際に登ってみても、中程にあるセ、八十米のスラブは、なかにのバランスクライムを要求されるし、進行の程度も丹沢の表沢より難しい。だが沢全体が綺麗なスラブである隣のゼニイレ沢あたりと比較すると、倒木と朽木が沢筋を

埋めていてお世辞にもキレイな沢とは言えず、進行価値の点で推奨し得るルートであるかという点になると、いさゝか首をかしげざるを得ない。

松の木沢と対岸の旧道あたりから眺めると、水量の多い時には無数の白布を掛けて大いに進行意欲をそそったものだが、いざ入ってみると棚はスラブに数段と、その上部詰め迄にセ、八米のを数段掛けているだけである。我々の入った時は水量が豊富であつた為、それでも水を浴びては、気分よく一気に上部まで詰めてしまつたが、水の滲れている折には一層価値を減するだろう。だがスラブや上部の棚の直登は、なかに面白く、上部に登るにつれて展げてくる谷川岳東面の眺望も捨て難い。これから白毛門に登ろうとする人では、辟易する尾根径をさげたい人には良いだろうし、又列車で土合に着いたが雨で谷川岳東面が登山に不都合な時ほど、雨の上るのを待って一気に短時間で登降出来る奥でこの沢は手頃だ

ろう。実のところ我々もこの時は幽の沢登攀が目的だったのだが、雨の鳥登攀を断念、十時過ぎ雨が止んだので折角赤尾の尻から入ったのであつた。

ヘルート

松の木沢へ入るには湯檢曾川を渡渉した方が早い。渡渉は出合附近に求められ水深は膝位。

出合からしばらくはガレ場である。途中右手から一本沢を入れる。出合から三十分程で沢筋が少し開けてスラブになる。この辺がこの沢では面白い。殆んどスタンスのない処もあるが傾斜は比較的ゆるい。向も狭く沢は二本に分れるがこれは右手に入る。この辺から沢筋は狭い滑状となり、水中にスタンスを求めて水を浴びながら快適に登れる。二、三登りにくい滝もあるが沢の横が数分なので木につかまって強引に登る。この上で沢は二分され、これを左手に入る

。岩が順層のたのぐん／＼ピッチを
 がせくと、やがて水もなくなつて草付
 が現われ、すぐ藪である。だが予期に
 反して大した藪漕ぎもなくヒョッコリ
 尾根径へとび出す。

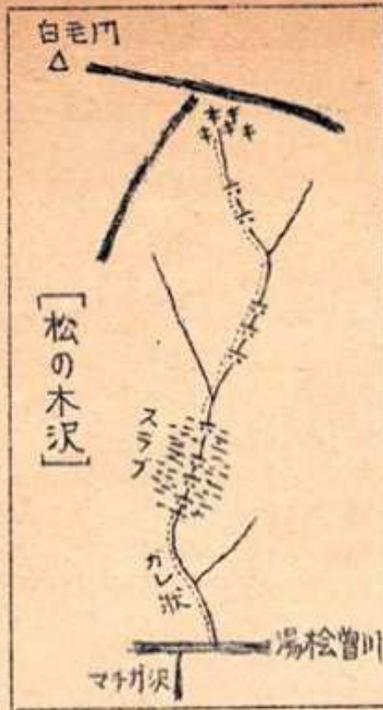
（日）八月三十日（曇）

（MEM）辻（勝）・柿沼・柏浦・篠原

（タイム）

出合（11.00）——尾根（13.00）——東

黒沢（14.20）



PI3のオジカ沢
 のコース・タイム

- 上野……19.00
- ↓水上……23.15
- ↓谷川温泉……0.15
- ↓ニ保……~4.00
- ↓大滝下……6.00
- ↓再び沢に戻る……8.20
- ↓稜線……12.40
- ↓土合……~13.00
- ……17.50
- ……20.00

日光女峰山紀行

筒井満栄

夏山をひかえ、トレイニングを兼ねてどこかへ行きたいと思つていたが
 何かと忙しく、去年雨のために登れなかつた女峰山へ行くことにした。
 一度登りたいと思つた山はいつまでも心の片隅にうすくようにその姿を映
 している。それほどに低く名もない山でも、大きな山でも、又岩場の
 一ルートにしても、誰の心の中にもそんな山が必ずあるのではないだろ
 うか。

私にとつてもこの山はそり一つであつた。標高差約二千米（日光五三〇
 米、女峰山二四六三米）全行程十二時間、交通も便利、土地の人以外には
 余り知られていない前日光連峯の一つである。もう一つは初級或は中級の
 冬山の一つとして考えられることも、この山に足を向ける動機となつた。

日光三時着、しと／＼降る雨は去年のことを思わせて、駈を出るのが
 鈍る。やつと三時半、暗い日光の町、遠くて犬の鳴き声、余り良い気持で
 はない。東照宮の横、ニ荒山神社のわきを左に登る。十分程で行者堂に出
 る。朽ちたお堂に草鞋がふら下り、周囲の草木がなお暗い感じを漂わせて
 いる。

雨は止みそうにないが、未合寄せた土地の人に、絶対晴れますよと言葉
 をかけられたので思い切って登り出す。防火線を越え、殺生禁断石、兒子
 ケ墓などという碑を通る。この頃より夜明けの空は次第に雲が切れ始め、
 日かこし始めた。アヤメ、シモツケ草、等々紫赤黄の花々の美しい草原状
 の登りとなる。此処をスキーで、と思うようなよいスロープが続く。

やがて尾根径へ出るが、割に巾広い道の両側はニッコウキスゲの花が黄色のカーペットを敷いたように美しく思わず声を出さずにはいらぬ。

急登を辿ると、八咫と呼はれる雲竜溪谷、Y字峽の展望台に出る。すっきり晴れわたった青空と、下から吹き上げる風が心地よい。

ニフミツガレ場をトラバースすると、前女峰の難が現れ、こゝからの奥日光連山、目の前の大真名子小真名子が素晴らしい。冬はアイゼンの領域であろう。これと奥横に渡り唐沢小屋に出る。立派な二段ベツト、真中にストロブ、と此処に泊って又峰山頂への御来迎は素晴らしいことだろう。

時間もないので昼食後、女峰大難を経て山頂に立つ。山頂は非常に狭くハイ松に囲まれ女峰神社がある。こゝより赤難り道と別れ、帝釈山たいしやくからモッココ平を抜ける。岩のヤセ尾根、文はす梅の木の中を夢中で降る。帝釈山からはガレ場続き、もうい岩に注意しながら、丁度途中で御一緒した栃木のり高校山岳部の後をついてきていた。長い下り。ガスが立ちこめ、余り景色もない。ときどき見えるケルンの影、そしてガレ場から再び樹林の中へ。時間を急ぐのでもり高校の方達と別れ、先にひた走りに下る。五時半日光駅着、何か満ちたりた

十三時間(休憩も含む)の行程を終ったのであった。

へ日 七月十三日
へタイム

| | |
|---------|----------------|
| 浅草 | 0.10 |
| 東武日光 | 2.35 ~ 3.30 |
| 行者堂 | 4.45 ~ 5.20 |
| 兒子墓 | 6.10 ~ 6.20 |
| 八咫 | 8.40 ~ 9.00 |
| 前女峰 | 10.10 |
| 唐沢小屋 | 10.20 ~ 11.15 |
| 女峰山 | 12.00 ~ 12.15 |
| 帝釈山 | 13.00 |
| 喜土見峠 | 13.40 |
| 瀧沢 | 14.10 |
| モッココ平 | 16.20 |
| 荒沢 | 16.55 |
| 裏見の滝バス停 | 17.20 |
| 東武日光 | 17.40, 18.20 発 |
| 浅草 | 20.35 |

何故山へ登るのか

登山者とはたゞ山へ登ることそれのみに悦びを感じるものである。

— Norman Collie —

私達か山へ登るのは、つまり山が好きだから登るのである。なぜ山に登るか、好きだから登る。答は簡単である。しかしそれで充分ではあるまいか。登山は志士大にするという、さうであらう。登山は剛健な気象を養うという、さうであらう。その他の曰く何、曰く何、しかし私などは唯好きだから山に登るというだけで満足する者である。

— 木暮理太郎 —

会務報告

1. 山話会の記録

- (1) 7月17日: PM. 7.00より村田氏宅にて。出席16名
①山行報告(ヒッポー沢, 女峰山) ②夏山計画発表(横尾合宿, 北ア縦走, 南ア縦走, 谷川合宿) ③県岳連理事会の報告(県体, 団体登山, 全日本登山大会の件)
- (2) 8月11日: PM. 7.00より村田氏宅にて。出席14名,
①谷峰山岳会榎本氏遭難の件。②山行報告(オジカ沢, 横尾合宿, 北ア縦走, 南ア全山縦走) ③谷川岳合宿打合せ。
- (3) 8月28日: PM. 7.00より村田氏宅。出席19名。
①今年度上半期の反省 ②秋の合同山行計画(紅葉の頃裏妙義に決定) ③冬山計画(次回に持ち寄ることにする)
④市岳連遭難対策要項の検討 ⑤浦和市市民山の映画の会の件。

2. 市岳連遭難対策委員会設立近し

かねてより懸念にほっていた遭難対策の仕事もようやく括まり去る9月12日の市岳連の理事会でその要項が決定。近く各会にそれら流されると同時に各会より委員2名を速出して委員会が設立される運びとなった。詳細は次の山話会で。

3. 県体登山部門

来たる10月4日花がら6日(予定) 県民体育大会の登山大会が飯能から秩父へかけての長次背稜をコースとして行われる。詳細と選手派遣は次の山話会で。

4. 会計より

毎度恐れ入りますが9月分迄の会費。お忘れなく納入して下さい。なお 臨時徴集の200円 まだ未納の方はお早く願います。

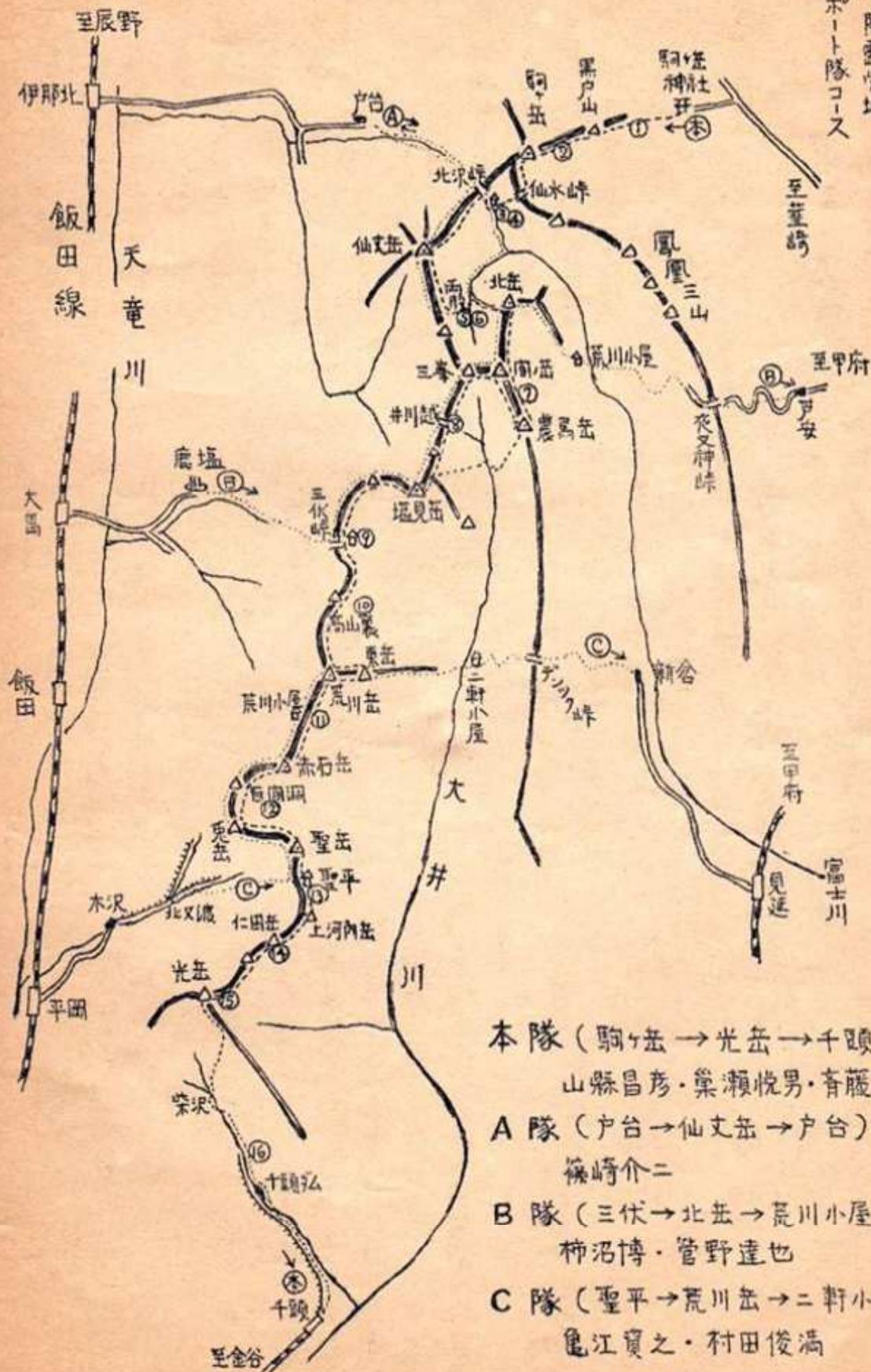
5. その他

- 谷峰山岳会より、榎本氏への香奠の御返しとしてコッフェル(大)1箇いたゞきました。
- 菅野達也君移転。(新住所)大宮市三橋2の1978。
大宮駅西口より、バス西遊馬、又は川越行き三橋三丁目下車

南アルプス全山縦走

7月23日 — 8月8日

○ 本隊コース
 ○ 本隊露堂地
 ○ サポート隊コース



- 本隊 (駒ヶ岳 → 光岳 → 千頭)
 山縣昌彦・柴瀬悦男・斎藤良則
- A 隊 (戸台 → 仙丈岳 → 戸台)
 篠崎介二
- B 隊 (三伏 → 北岳 → 荒川小屋)
 柿沼博・菅野達也
- C 隊 (聖平 → 荒川岳 → 二軒小屋)
 亀江寛之・村田俊満

この南ア全山縦走は現役（浦和市立高校）山岳部が数年前から狙い計画していたものであった。ということはおもも直さず我か溪稜の諸士が数年前に互って専ら礫石を築いてくれているわけであり。今年度の現役は幸にもその先輩達の肩の上に乗って、輝かしい全山縦走をなし遂げることが出来たのだとも言えよう。

実際の山行に於いては人数の呉からも現役が主体であり、溪稜のメンパーは言わば引率の補助として歩いて来たよう形であるが、前記のような意味からも今回の全山縦走は現役の浦和市立高校山岳部と、OB Gである溪稜山岳会とが合同して遂げたと言ってもよいと思う。

以下各隊の簡単な報告をのせるが、コース、装備、食糧、その他詳細はデーターは現役の発行する「やまなみ」四号に発表される予定であるから、それと御覧いただきたい。

（以上浦和市高山岳部領南山縣記）

本隊

山縣昌彦
巢瀬悦男
（香藤良則）
現役三名（田中・小泉・金子）

才1日（7月23日）雨・晴後曇

王子駅... 4.57 着
八王子駅... 7.57 着
↓ 10.30 着
駒ヶ岳神社... 11.32 着
↓ 12.10 着
平△... 15.00

新宿発夜行の混雑を避ける為、前夜八王子駅で仮泊したが、折しも台風11号の関東上陸で登山者は肉散。

バスで駒ヶ岳神社に向かう頃より天気回復。青空に勇躍尾白川の吊橋を渡り、平に向かう。世ノ平は期待通り、良き幕営地なり。

尾白川を渡る時はさすがに前途の長きと思ひ、希望と同時に重苦しい不安を感じざるを得なかった。

才2日（7月24日）曇後雨

平△ 7.25
↓ 黒戸 9.55
↓ 五合目 10.55
↓ 七合目 12.00
↓ 小屋 13.15

相変わらずきつい登り。五合目小屋に着く頃より雨となる。七合目の下から二番目の小屋は11号台風で屋根がずれ惨憺たる有様。烈しい雨の中、水場の近くの猫の額程の平地に幕営する。

才3日（7月25日）風雨強後小雨

小屋△ 8.45
↓ 七合目 10.15
↓ 駒ヶ岳 11.45
↓ 仙水 12.40
↓ 北沢 13.30

ともかくも駒を越えぬ話にならぬ。激しい風雨を衝いて駒ヶ岳を越す。怪はすべて激しい泥水の流路

と化していた。駒よりの下りは案じた程の事はなかったが、北沢の増水ぶりには驚く。

オ4日(7月26日)雨

昨日よりの雨まだ止まず、停滞する。

オ5日(7月27日)晴→曇→雨

| | |
|------|-------|
| 小屋 | 6.15 |
| 北沢小屋 | 8.00 |
| 仙文小屋 | 8.30 |
| 仙文岳 | 9.45 |
| 仙文岳 | 10.10 |
| お花畑 | 11.00 |
| 高望池 | 12.00 |
| 高望池 | 13.30 |
| 高望池 | 15.00 |
| 高望池 | 15.40 |

藪沢小屋の少し手前で斎藤君石手の崖に転落。降続いた雨で連端の土がゆるんでいたのと、荷が重過ぎて体の自由が利がなかった為であろう。腰を打った為、斎藤・染瀬は仙文小屋泊り、山縣だけ現役を連れて向股まで行く。

高望池の西一寸下に水場あり。向股でサポートA隊と一緒になる。野呂川の増水甚しく橋は流されて渡渉、股までつかる水は冷たい。又雨。

オ6日(7月28日)雨→曇

まだ降り続く雨、停滞。A隊は北岳を諦めて野呂川沿いに北沢へ戻って行く。こちらも気が減入り、前途の多難を思う。

オ7日(7月29日)晴→快晴

| | |
|-----|-------|
| 向股 | 6.00 |
| 大滝 | 7.00 |
| 水出合 | 7.50 |
| 北岳 | 11.00 |
| 北岳 | 12.00 |
| 北岳 | 15.00 |
| 北岳 | 15.30 |
| 北岳 | 16.30 |

北岳への最後の詰め、右へ入りすぎ、ヤブ潜ぎ三十分余。好天の北岳山頂は始めて感慨無量。三六の度の展望言ふことなし。北一間の三千米の稜線は、こういう晴天の日こそ歩きたい。

向、岳の極大なる山頂も迷うことなく、農鳥石室へ。石室は立派に修築され番人有り。少し先の稜線わきに幕堂。往復三〇分以上かゝる水場の不便さを除けば眺望佳絶、絶好の幕堂地である。

夜、満月皎々と注之。正面に富士、

左右に北一間ノ岳、農鳥岳のシルエット、詩情溢れくるを感ず。

オ8日(7月30日)快晴

| | |
|------|-------|
| 農鳥石室 | 6.00 |
| 農鳥岳 | 6.40 |
| 農鳥石室 | 7.00 |
| 農鳥石室 | 7.30 |
| 農鳥石室 | 8.20 |
| 農鳥石室 | 9.45 |
| 農鳥石室 | 10.20 |
| 農鳥石室 | 11.00 |
| 農鳥石室 | 12.00 |

朝のうち農鳥岳往復。北岳は耳二つの鋭峰となつて聳ゆ。

熊ノ平は井川越の手前にあるハイ松の高原状地を言うのであろう。熊ノ平小屋は井川越大井川側にあり、東海パルプ所有の無人小屋である。夜正面向ノ岳の肩より月昇る。

オ9日(7月31日)曇時々晴

| | |
|-----|-------|
| 熊ノ平 | 5.20 |
| 熊ノ平 | 8.00 |
| 熊ノ平 | 8.40 |
| 熊ノ平 | 9.50 |
| 熊ノ平 | 10.20 |
| 熊ノ平 | 11.30 |
| 熊ノ平 | 15.30 |

東西のガレでぼったりB隊に会う。

予期していなかっただけに余計姑しい。

互に前途健闘を祈りつゝ、別れる。

此のルートは我々会長若副の記録があるだけに心配していたが、展望がまいていた為か案ずる程の事なく極見の頂に立つ。と四日前に別れた集瀬君がひよっこり現れた。集瀬君は仙丈小屋一泊の後、下山する香藤君と別れ、仙丈岳↓三峯岳↓向ノ岳↓農島岳↓池ノ沢↓極見岳と我々の後を一人で追って来たこのこと。その頑張りには舌を巻いた。

三伏までは思ったより長い。三伏小屋は二軒、二階建。小屋のわきは天幕設営料一五〇円(一張り)をとられるので、少し上に張る。業外露堂地が少い。小屋に行きB隊よりのサポート品を受け取る。ずっしり重い梱包、これを揚げてくれたB隊に感謝する。全山縦走は本隊だけでやれるものではない。サポート隊あってこそこの全山縦走である。

才10日(8月1日)ガス風強し後晴

| | | |
|----|---|-------|
| 小屋 | △ | 7.00 |
| 三伏 | △ | 7.50 |
| 三伏 | △ | 9.20 |
| 三伏 | △ | 12.00 |
| 三伏 | △ | 13.00 |
| 三伏 | △ | 13.50 |

猛烈なガスと風を衝いて鳥帽子から小河内岳を越える。大日影山を過ぎ板屋岳は何処か頂上やら分らず。中腹をからんでいるうちに下りとなり高山裏露堂地に着く。一寸下れば小西俣水源の小さな池と水場あり、一方が開けた静かな良き露堂地である。三伏より荒川小まで這一日でも入れるが、荒川岳へのあの一直線の碇易する登りを考へると、此処での一泊も棄て難い。

才11日(8月2日)曇時々晴

| | |
|----|-------|
| 小西 | 6.30 |
| 俣 | 9.30 |
| 川 | 10.30 |
| 川 | 11.00 |
| 川 | 13.00 |

荒川岳への直線登路は少しきつい。

荒川岳主稜の中岳手前の鞍部に荒川小屋への下り口あり。東岳(悪沢岳)へは空身で往復する。ガスが激しく展望がみえず、再び戻ってカール状地を荒川小屋へ下る。荒川小屋の親爺はひどい双足、この辺何処へ天幕を張っても一五〇円取るのはとても、落ちてくる木の枝一本拾ってはいけない。焚火は一切放棄という始末。眠前の秀峰富士の眺めと、アイベントロートの荒川岳が唯一の慰め。

才12日(8月3日)晴

| | |
|----|-------|
| 小屋 | 6.00 |
| 川 | 7.50 |
| 川 | 9.00 |
| 川 | 10.15 |
| 川 | 11.30 |

大聖寺平と通って赤石岳へ。楽に登りである。測量の樞が立っている。

百回平は名前通り広々としたハイ松と砂礫の高原、雪の上の砂礫のようは高庚

たか、片スにても巻かれると一寸迷い
 そうだ。百洞洞沢の最上部に良き幕営
 地あり。此処も意外に平地がなく幕営
 に適する処が少い。

才13日(8月4日)晴

源 6.00
 木 7.00
 洞 7.25
 鞍部 8.35
 山 10.45
 云 11.45
 云 13.00
 平
 聖
 聖

百洞洞沢に沿って下ると右手に百洞
 洞山の家あり。そこから右手に急登す
 る。中盛丸と大沢岳との鞍部へどび
 出す。

鬼から聖へは急降と急登である。聖
 への登りにかゝる辺に赤みがかつた石
 多し。これが赤石山系の名の由縁であ
 る。聖は縦走路最後の三千米峰。こ
 れで南アの三千米峰は全部歩いたこと
 になり感慨無量。

聖の下りには富士の須走のような細
 かい砂礫の地帯あり。ザザッーと滑る

ように下る。聖平上の御花畑はきれい
 やはり入る人が少い所為か。
 聖平でサポートC隊に会う。もう此処
 まで来ると我々よりむしろC隊の方が
 心配である。

才14日(8月5日)曇一夜雨

平 6.50
 河 9.20
 花 9.30
 畑 10.00
 日 11.30
 茶 12.10
 田 12.20
 小屋

上河内岳は縦走路から外れているが
 縦走路へ荷を置いて簡単に往復。
 五万分の一図にあるお花畑もそれ
 程花が有るわけではないが、トウマ
 クリントウの草在する美しい草原で
 ある。

仁田小屋は汚い仁田池を前にした
 無人小屋。今夜の雨を見込んで小屋
 に泊ったのは賢明であった。小屋裏
 の平地は一雨来ると水浸しになる。
 仁田池の水は汚くて一寸いたゞき

かわるか。十介程下れば水場がある

才15日(8月6日)雨時々曇

仁田小屋 9.50
 易老 11.00
 易 11.45
 光 13.45
 小屋

易老岳へは三極簡単に着く。恩面
 木立に囲まれてつまらぬ頂上である
 。雨の中を光岳へ向う。途中鞍経か
 水の流路が、人の踏跡がさだかなら
 ざる程を踏み分けで行くと青々とし
 た草原に出る。人ツ子一人居ない楽
 園の感あり。光小屋は上下に二軒(無
 人)あり。上の方が立派。南アの
 無人小屋では一番だろう。

才16日(8月7日)雨一夜曇

小屋 7.30
 光 7.45
 光 8.00
 岐 10.10
 早橋 10.30
 芝 11.30
 登 13.00
 千頭 17.30
 流上

また霧のような雨が降り流れている。先岳頂上への径と柴沢への径の分岐は小屋の直ぐ上であり、十分余で頂上に着く。木立に囲まれた何の変哲もないピークで、先岳と書かれた板片とケルンとが僅かに頂上らしさを表している。然し長い苦しい縦走の最終突として今此処に立つ我々の胸は感慨無量、皆夫々の思にふけて黙然と佇んでいた。浦市高山岳部と溪稜山岳会の万才を三喝して最後の山頂に別れを告げた。

柴沢までは固体で拓かれた跡が僅かに残っている程度の径、倒木とヤブで時々径と失いさうになりながら急降二時間で柴沢の吊橋一丈又川一まで下る。山日記では六時間の行程である。

柴沢小屋は素通りし、寸又の激流を下に見ながら下りを急ぐ。

釜ノ島と呼ばれる辺ではたと道とを失う。昔軌道があったらしい廃道に入り込み、背よりも高い草ヤブをか

き分けがき分け、天井から水のした、無気味なトンネルの中でこれはおかしいと気付き一と休みした。五万分の一地図のルートは此の廢道らしいと鳩首協議。手、足の変な痛みに見ると血を吸って膨れあがった蛭が数匹ぶら下っている。雨に濡れ震えながら元の径を戻り、やっと固体で拓かれたらしい新道へ出、蛭街道を抜けた。釜ノ島小屋という立派な無人小屋あり。次に橋沢小屋あり、更に下って大根沢出合まで来れば今度は本物の軌道に出る。然し処々土砂崩れで寸断され、「落石危険区域」とか「機関車転落現場」と書かれた立札が随所に立っている。

片方は高い断崖、片側は足下はるかに寸又の急流が渦を噛み、黒部の溪谷を思わせるものがある。大根沢出合で三十数キロ二十頭から(？)のキロ数を示す杭が〇五キロ毎に軌道のわきに立っているが、その数字が〇五ずつ減るのと唯一の楽しみに棒と化した足を運ぶ。

川幅ようやく広く流れもや、ゆるくなつて、千頭ダム近しと思われ、頃日も背後の山なみに没し、ようやく暮空出まそうな河原を見つけて下り立った。

★17日(8月8日)晴

| | |
|----|-------|
| 流上 | 7.40 |
| 千頭 | 8.10 |
| 大 | 9.45 |
| 千頭 | 10.30 |
| 大 | 14.30 |
| 千頭 | 14.45 |
| 谷 | 21. |
| 東 | |

枕木を踏んでの単調な軌道径の行進が今日も続く。

大洞部落の少し上、景勝地竜頭橋と千頭との間に人間をのせる軌道車が一昨日一往復しているが、上りは午後二時一本なので歩いた方が早いと歩き続ける。真暗なトンネルが次々に現れるが、我武者羅に歩き抜けるうち、或るトンネルで次々に全貫溝に落ち込み、つまりぬ怪我をした。

例の杭のキ口敷が2にはり1位にはり
 1、土こなっても町らしいものは一
 向に見当たらず、狐につま、れたよう
 な気がした。と今度は立派な線路道が
 現れ、35キロの杭が立っている。この
 最後の35キロの辛さは骨身にこたえた
 千頭から大井川鉄道で東海通線金谷
 へ、あとは山賊然とした坊と日焼けて
 真黒、ホロをまどった我々は、ギレイ所
 をのせた東海通線の車に少々戸惑いし
 ながら、永しふりの東京へと戻ったの
 であつた。

A 隊

(現役四名)

篠崎 介二

本隊と一諸に出発したA隊は、戸台
 ↓北沢峠↓仙丈岳↓函股↓北岳 と本
 隊より一日先行して北岳へ登り、北岳
 小屋若しくは農舎小屋に本隊へのサポ
 ート品を置いて、大門沢へ下る予定で
 あつた。処が最初から連日の雨に降り

こめられ、藪沢小屋で三日停滞、翌
 日仙丈から高鹿尾根と越之函股に入
 った処で本隊に追いつかれ、その翌
 日も又雨で、とうとう現役も計画
 の遠行と諦め、サポート品と本隊に
 渡して野呂川沿いに北沢、北沢峠、
 戸台へと退却した。

B 隊

(現役五名)

柿沼 博
 菅野 進也(記)

オ一日(7月27日)

台風十一号が後をひいてか毎日雨
 が続く。本隊のことを心配しながら
 B隊は出発した。いつもは峠の巢を
 つついたように騒がしい新宿駅も登
 山者の姿はなくひっそりしている。
 登車の直前にD隊からの連絡がど
 いた。本隊は北沢にA隊は藪沢小屋
 に停滞しているとの事。

(註) D隊とは現役山岳部女子のみ

の勝て、戸台↓北沢↓仙丈往復↓駒
 ↓白狼の予定であつたが悪天候のた
 め駒だけ放棄して再び戸台へ戻
 った。

オ2日(7月28日)曇

藪塚―入沢井―塩川―避難小屋

道路が台風で寸々壊れた為、バス
 は伊那入島から鹿塩迄しか入らず、
 残りは歩くより外はなかつた。
 塩川迄は処々土砂の崩れた林道と歩
 く。塩川より一五km先に避難小屋が
 あり、そこでオ一夜を過ごす。

オ3日(7月29日)晴

避難小屋―南沢よりの介岐―三伏峠
 ―三伏小屋

心配していた十三号台風もそれた
 のが晴天となる。南沢より離れて尾
 根に取り付くと背後に中アの山々が
 顔を出してくる。サポート品が重い
 為、ヒッチは上らず、予定タイムの倍
 の時間を要す。三伏峠のお花畑から

C 隊

(現役五名)

村田俊満(記)
亀江寛之

才1日(8月1日)曇

浦和日辰野→平岡→木沢

飯田線平岡駅より信南交通バスで木沢へ向かう。木沢宮林局事務所前で下車。直ちに河原へ下り幕営する。

明日から七日間の前途を思う。

才2日(8月2日)晴

木沢(梨本)→途中まで軌道→易老渡→西沢渡

宮林局事業所へ林用軌道の便乗を依頼したが断られ、荷物だけ頼み先に行く。(但し事業所より見えない所迄行くは、どりのこと)。途中軌道車が来たのぐ之に乗せてもらい、北又渡の三キロ手前迄乗って行く。(台風のため鉄橋流失)

この地方の人々は非常に親切で感じが良い。此処から軌道沿いに易老渡迄来たが、易老渡より易老岳への登路は非常に悪く、十貫余の重荷では無理だろうとの土地の人の話で、西沢渡から聖平へ登ることにし、西沢渡迄足を延ばす。

才3日(8月3日)晴

西沢渡→鮮畑→聖平小屋

西沢渡より急な登り、喘ぎの末鮮畑へ出る。重荷の為相当予定時間とオーバーする。途中もの悲しげな鹿の鳴声を耳にする。鮮畑より聖平小屋迄十五分。聖平小屋には相当数の先着者があり混んでいた。

才4日(8月4日)晴 午後夕立

聖平小屋→上河内岳往復

本日此の小屋で本隊と会う予定の鳥、上河内岳迄往復。帰ってみると本隊は既に到着していた。相次ぐ台風の中を突破して来たのであろうに皆元気が

椅子なので安心した。

こゝで感激の握手を交わし夕食と共にする。山積した話は盡きないが、話は又帰ってからと七時就寝。

才5日(8月5日)曇

聖平小屋→聖岳→免岳→百回洞露堂地

名残惜しいが本隊と別れ、早朝出発。今回最初の三千米峰聖岳へと向かう。聖岳頂上に着く頃よりガスが切れ、赤石岳、荒川岳、上河内岳、北アルプス、中央アルプス連峰が見え始める。しばらく休憩して聖岳を下る。

免岳、大盛丸山を過ぎて稜線から右へ下ると百回洞露堂地はもうすぐである。百回洞沢を遡り、源流で幕営する。

才6日(8月6日)曇

百回洞露堂地→百回平→赤石岳→

—大聖寺平—荒川小屋

百回洞より百回平への急な登りをかせき、いよ／＼赤石山系の盟主赤石岳への登りにかゝる。頂上はガスで見えないが、介りにくいガレの径を踏跡を拾って通り登る。頂上には三角点の櫓が立っている。櫓の下に数人の登山者が居るのみで極めて静かである。

赤石岳の大展望を得んものと早朝出発して来たのだがこのガスで残念である。

大聖寺平には末尾に墜落飛行機の残骸が散らばり痛ましい。

荒川小屋は此処から十五分。暮堂。

オ7日(8月7日)雨

雨の爲停滞、食糧はまふ豊富なので豪華な食事ととり、小屋の連中を羨しからせる。

明朝は多少の雨でも出かける予定で夕食を早めにとり、六時就寝。

オ8日(8月8日)晴

荒川小屋—荒川中岳—荒川東岳(悪沢岳)—マンボ—沢の頭—二軒小屋

今朝は昨日に変わる良い天気となり、モルゲンロートに映える山々と眺めながら荒川前岳へ向かう。

荒川前岳よりの展望はすばらしく遠く北ア、中アの連峰、近くは塩見岳、向、農鳥、北岳、仙丈、駒等、南アルプスの北部も南部も手にとるように望める。

小憩の後、東岳へ向かう。

最後の三千米峰東岳で十分展望と楽しみながら昼食ととり(八時)、三千米の稜線に別れを告げて一気に二軒小屋へ下る。

二軒小屋は立派な建物である。最後の夕食をたらふく詰め込み、最後の夜を迎える。

オ9日(8月9日)晴

二軒小屋—転付峠—新倉—身延—富士

↓浦和

三時起床、いよ／＼今日はず界へ下れると皆張り切って出発。

こゝまで下って来た上での転付峠への登りはいさゝかこたえる。

峠よりだら／＼下る山道を三時頃からいで新倉へ出る。

丁度うまく臨時のバスが来たのでそれに来り、一路身延へ。

全員の食のようは恰好で富士より東海道線に乗り換え帰京した。

このコースは聖平へ入る途に難があるが、聖平まで入ればあとはそれ程の起伏もなし、南アの南部を歩くのに良いコースだ。

逆に二軒小屋から入り、我々と逆に歩いて光岳から千頭へも考えられる。ともかく、予想したよりも人が多く入っているのには驚きもし、又少々幻滅も感じた。

—以上—

編 集 後 記

七月から八月にかけての山行報告をまとめ、ここにオ
九号をお送りします。内容は御覽のように殆んど山行の
記事で、随想等の記事が少なくなつてしまつたのは、皆
さんの山行の盛んであつたことの表われでもありませんよ
うか。次のオ十号は創刊オ十号記念としてバラエテイ
のある内容にしたいと思ひます。

★

この夏は皆さんよく出かけたようです。谷川岳合宿が
思ひぬことで予定通り行へなかつたことは残念ですが、
あれを目事された諸士は勿論、その他の方々も、各自み
つちりと基礎技術の習得の必要なことを改めて認識され
たこと、思ひます。

★

きり、と気介も引き締まる紅葉の秋、そして固もなく
新雪の冬を迎へようとしています。今からよく会の計画
を練つて、この期間を有効に過ごしたいと思ひます。
秋の合同山行には全員参加しましょう。

○ 卷頭の会長の言葉の中にもありますが、一部の人への

仕事の偏重を是正し、皆で仕事を分け持つて会を良くす
ることに努めましょう。会の発展は会員一人一人の手に
よつて始めてなされるのであり、それが又会員自身の向
上となるのだということを改めて認識して下さい。
山話会、山行計画、会報発行等の仕事の当番制なども
その一つの方法でしょう。

毎度の貴会の会報御送附有難うございます
今後ともよろしく御指導下さい。

各山岳会殿

溪稜山岳会

溪 稜 才 9 号

発行日 昭和33年9月17日

発行所 埼玉県浦和市高砂町5-89 辻方

溪稜山岳会

代表者 辻 勝四郎



溪稜山岳会
埼玉県浦和市高砂町5-89